

ちりレポ第 20 号 電子版 はじめに

城北中学・高等学校地理部では、中学生・高校生の垣根なく一体となって活動し、様々な都市で巡検や合宿を行ってその地域の自然、歴史、文化、産業等を調査した。この「ちりレポ」はその内容を報告するための機関紙である。

節目の第 20 号を迎える今回は、品川区、大田区の湾岸エリア巡検、それに続く中央区、江東区の湾岸エリア巡検、そして夏の松本合宿において感染症による制限の中、我々が学び、感じたことなどをまとめている。

読みやすくありながらも部員の個性や各地の魅力が詰まっている文章で、普段地理に馴染みのない方でも満足していただける内容となっている。地理部部長として、これを機に地理に興味をもってもらえると嬉しく思う。

また、読んだ後は是非、実際に自身の五感を使ってこれらの土地を歩いてもらいたい。文字からは分からないことは往々にしてあるからだ。想像や、過去とのギャップも含めて楽しんでいただきたい。

それでは第 20 号、最後までお楽しみください。

2023 年 3 月 31 日

城北中学・高等学校地理部部長 長谷山 悠斗

ちりレポ第 20 号 目次

はじめに	1
ちりレポ第 20 号 目次	2
第一章：夏合宿～松本・諏訪地方	
.....	3
第二章：東京湾西岸の考察	
.....	52
第三章：TOKYO ウォーターフロント	
.....	78
第四章：付記	
部員紹介	97
夏合宿要項	99
夏合宿・巡検参加者	100
おわりに	101

第一章

夏合宿～松本・諏訪地方 (2022年8月1～3日)



行程表 1日目(8月1日)

文責：顧問 齋藤

新宿 発 8:00 あずさ5号
上諏訪 着 10:12
発 10:21 中央本線普通
下諏訪 着 10:26
下諏訪駅 出発(10:30)

↓ 徒歩 15分ほど

◎諏訪大社下社 秋宮 見学時間 45分ほど(10:45~11:30)

○日本電産サンキョーオルゴール館 見学時間 45分ほど(11:35~12:20)

○星ヶ塔ミュージアム(しもすわ今昔館) 見学時間 45分ほど(11:35~12:20)

***** 昼食(12:20~13:20) *****

◎二街道の合流点・下諏訪宿本陣 見学時間 15分ほど(13:25~13:40)

↓ 徒歩 20分ほど

◎諏訪大社下社 春宮 見学時間 45分ほど(14:00~14:45)

↓ 徒歩 10分ほど

◎おんばしら館よいさ 見学時間 30分ほど(15:00~15:30)

↓ 徒歩 30分ほど

下諏訪駅 到着(16:00)

下諏訪 発 16:27 中央本線普通

松本 着 16:58

***** ホテル 到着(17:15) *****

注：◎印の施設は全員で見学します。○印の施設はどちらか選択になります。

行程表 2日目(8月2日)

文責：顧問 齋藤

***** ホテル 出発(8:20) *****

松本発 8:43 中央本線普通

岡谷着 9:10

岡谷駅 出発(9:20)

↓ 徒歩 30分ほど

◎岡谷蚕糸博物館 見学時間 1時間 30分ほど(10:00~11:30)

↓ 徒歩 30分ほど

岡谷駅 到着(12:00)

***** 昼食(12:00~12:45) *****

午後 班別行動

< 上諏訪班 >

岡谷発 13:00 中央本線普通

上諏訪着 13:09

上諏訪駅 出発(13:15)

↓ 徒歩 15分ほど

○高島城

見学時間 40分ほど(13:30~14:10)

↓ 徒歩 25分ほど

○湖畔公園から望む諏訪湖

○上諏訪温泉郷

○諏訪湖間欠泉センター

○たけや味噌会館

見学時間 1時間ほど(14:35~15:35)

↓ 徒歩 15分ほど

上諏訪駅 到着(15:50)

○上諏訪駅構内足湯

上諏訪発 16:22 中央本線普通

松本着 16:58

< 岡谷班 >

岡谷駅 出発(13:00)

↓ 徒歩 10分ほど

○丸山タンク

○蚕霊供養塔

○金上繭倉庫

} (13:10~13:40)

↓ 徒歩 10分ほど

○旧林家住宅

見学時間 30分ほど(13:50~14:20)

↓ 徒歩 30分ほど

○天竜川釜口水門

見学時間 40分ほど(14:50~15:30)

○岡谷湖畔公園から望む諏訪湖

見学時間 15分ほど(15:30~15:45)

↓ 徒歩 15分ほど

岡谷駅 到着(16:00)

岡谷発 16:31 中央本線普通

松本着 16:58

***** ホテル 到着(17:15) *****

注：午後は岡谷に残るか上諏訪に移動するか選択になります。

行程表 3 日目 (8 月 3 日)

文責：顧問 齋藤

***** ホテル 出発(9:30) *****

↓ 徒歩 20 分ほど

◎松本城 見学時間 1 時間 30 分ほど(10:00～11:30)

◎城下町「松本」を巡る①～武家町編 見学時間 1 時間ほど(11:30～12:30)

***** 昼食(12:30～13:30) *****

◎城下町「松本」を巡る②～大名町・町人町編 見学時間 2 時間ほど(13:30～15:30)

↓ 徒歩 20 分ほど

松本駅 到着(15:50)

松 本 発 1 6 : 3 0 あずさ 4 6 号

新 宿 着 1 9 : 0 6

< スピンオフ 中山道の宿場町「奈良井」 >

松 本 発 1 0 : 3 0 中央本線普通

奈良井 着 1 1 : 2 6

○宿場町「奈良井」を巡る 見学時間 1 時間半ほど(11:30～13:00)

奈良井 発 1 3 : 2 5 中央本線普通

松 本 着 1 4 : 2 1

注：希望者は松本城・城下町の代わりに中山道の宿場町奈良井へ行きます。

長野県の自然概要

文責：元岡 惇

長野県は海岸から遠く離れた内陸に位置していることから、全県的に内陸特有の気候である。

県土の広い長野県は日本海側気候の特色と太平洋側気候の特色を併せ持ち、山脈や盆地の形状などにより地域の天候が異なっている。実際に、松本市や諏訪市の高所から周囲を見渡すと、周りを山が取り囲んでおり、まさに盆地というような地形だった。長野県は周囲が高い山に囲まれているため、降雨量が少ない。

また、夏の気温に関しても、都心よりは比較的過ごしやすいようだ。(昼は暑い、夜の気温は 25 度前後だった。)

以上のことより、全体的に過ごしやすい土地柄であるといえる。



【写真：諏訪湖】

撮影：元岡 惇

<参考文献>

- ・ <https://www.naganoken-gakushuryoko.net/about/> (最終閲覧日：2022年8月5日)

フォッサマグナ

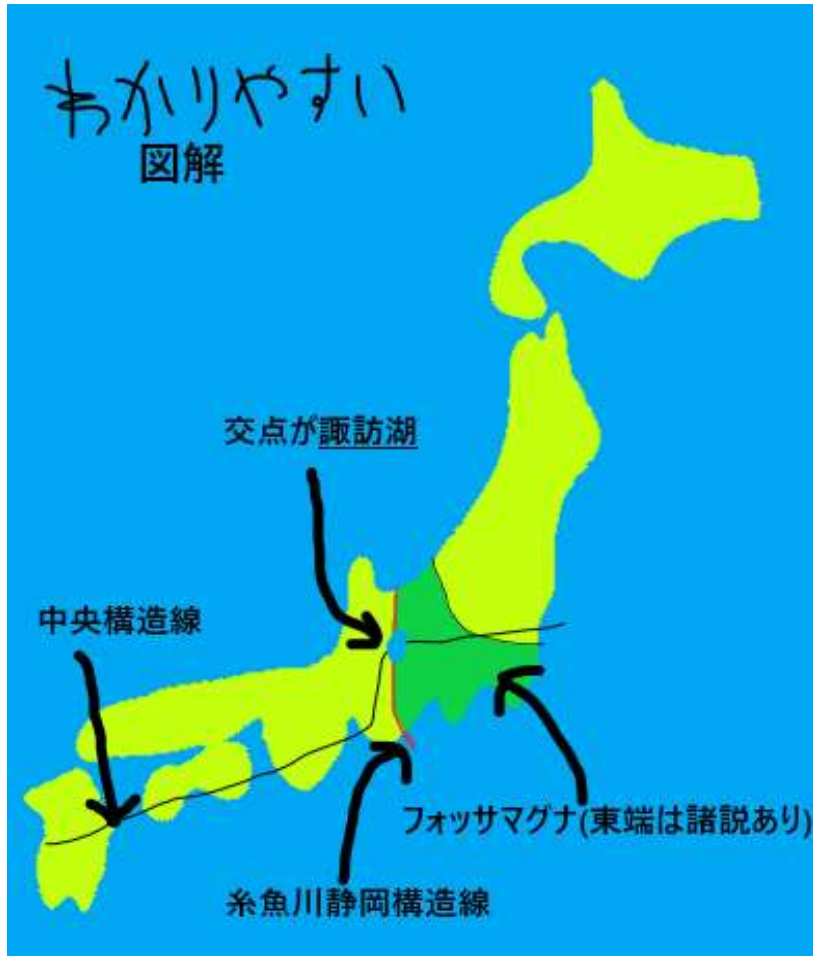
文責：市川 洸太

フォッサマグナは日本列島がユーラシア大陸から分離してできた溝に新しい地層が堆積してできた地溝帯。日本列島を南北に横断しており、地質学的な東日本と西日本の境界である。西端は糸魚川静岡構造線で、東端は諸説あり定かでない。フォッサマグナという言葉自体はラテン語で大きな溝を意味しており、その名の通り日本列島は主に古生代から中世代の岩石から成っているのに対し、このフォッサマグナには比較的新しい岩石が堆積している。また、諏訪湖は、フォッサマグナの西端である糸魚川静岡構造線と、日本列島を東西に横断する中央構造線の交点に位置しており、これらの構造線によって形成された窪地が諏訪盆地である。諏訪湖もこの活動に伴って作られたと考えられている。余談だが、この諏訪盆地は先述した通り大地の活動によって形成されているため、1977年から2007年までの30年間で57cmも沈下している。これは、糸魚川静岡構造線と中央構造線という超大規模な地形同士が交わっている、この特異な環境だからこそ起こる現象であり、地球の想像もつかない大きさと、自然の雄大さを感じさせる。



【写真：諏訪湖】

撮影：市川洸太



【画像：構造線についての図解(略図)】

作：市川洗太

天竜川

文責：塚崎 瑛登

天竜川は、八ヶ岳の最高峰であり標高 2889mである赤岳を源流として一旦、諏訪湖に流れ、釜口水門から天竜川として再び流れ出し、伊那盆地を通り、遠州灘に注がれる川で、流路の長さは 213 kmで全国 9 位、流域面積は全国 12 位となっている。また下流には浜松市が、中流には飯田市があり、長野県辰野市と愛知県豊橋市を結ぶ JR 飯田線は、ほぼ天竜川沿いを通っている。

天竜川は、古くから洪水を起こしやすい川であったため、1938 年から浜名湖に天竜川の水を浜名湖に流す工事が着工された。1979 年に完成し、現在では、この治水工事のおかげで静岡県西部は国内有数の農業地帯となった。

また、中流から下流にかけてはダムが数多く建設され、中でも愛知県と静岡県の県境の一部になっている佐久間ダムは堤高が全国 9 位、総貯水量は全国 10 位となっている。この佐久間ダム建設工事は 1953 年に着工し、1956 年に完成した。

天竜川の中流の諏訪湖から伊那盆地にかけては中央構造線が走っていて、また松本から諏訪湖にかけては糸魚川静岡構造線が通っていて、諏訪湖は 2 つの構造線の合流点となっている。



【写真：釜口水門】



【写真：佐久間ダム】



【写真：諏訪湖】



【写真：釜口水門水の資料館内にある模型】

※写真の撮影はすべて塚崎瑛登 ※佐久間ダムの写真のみ<出典>hellonavi.jp



【写真：釜口水門と天竜川】

撮影：顧問 齋藤

下諏訪町概要

文責：安藤 隼太郎

下諏訪町は諏訪湖の北部にある長野県諏訪郡の町である。諏訪市や岡谷市と共通して、諏訪湖や八島ヶ原湿原、下諏訪温泉、諏訪大社などがある観光地かつ門前町の側面も見られる。かつては、中山道、甲州街道の分岐する宿場町として栄えていた。実際に行ってみて神社などの昔ながらの光景が残っており、隣接の岡谷市に比べて歴史のある町だと感じた。



【写真：諏訪大社 下社秋宮】

撮影：安藤隼太郎



【写真：JR 中央線下諏訪駅】

撮影：顧問 齋藤

下諏訪宿

文責：犬島 伸遥

下諏訪宿は、現在の長野県諏訪町の中心部にあたる場所にあり、難所であった和田峠の西の入り口で、諏訪大社下社の門前町として栄えた。また、甲州道中の終点でもあり、食事を提供する 45 軒の旅籠があった。古くは鎌倉時代から温泉の利用が確認されており、中山道で唯一の温泉のある宿場で、当時の絵画などには温泉を利用する旅人たちが描かれている。この下諏訪宿は中山道と甲州道中の合流点という非常に栄えた宿場町であると同時に、盆地という地形を生かした温泉街でもあり、江戸時代は宿場町、明治時代は養蚕業、現代では精密機械工業と、どの時代においても重要な役割を果たしてきた諏訪地方の歴史を感じることが出来た。今回の合宿ではまず下社の秋宮を訪れ、その後春宮に向かった。下諏訪宿はこの途中に位置していた。



【写真：甲州道中(手前)と中山道(奥)の合流地点】



【写真：合流地点の石碑】



【写真：旧甲州道中】



【写真：当時の様子】

※写真の撮影は全て犬島伸遥

<出典・参考文献>

- ・ <https://shimosuwa.com> (最終閲覧日 2022 年 8 月 15 日)
- ・ <https://shimosuwaonsen.jp/feature/1333> (最終閲覧日 2022 年 8 月 15 日)
- ・ <http://home.b05.itscom.net/kaidou/nakasendo/4nagano2/29shimosuwa.html>
(最終閲覧日 2022 年 8 月 15 日)



【写真：現在の中山道下諏訪宿の景観】

撮影：顧問 齋藤

諏訪大社

文責：坂本 佳翼

諏訪大社は、国内で最も古くからある神社の一つ、全国にある諏訪神社の総本社で、諏訪湖を挟んで上社下社にそれぞれ二宮置かれている神社である。ただし、上社下社で社格に違いはない。

上社の祭神は建御名方神、下社の主祭神はその妃神の八坂刀売神で、古事記に記されている国譲りの神話の時に逃げ込んできた地が諏訪であることに由来する。古事記に記された国譲りについて簡単に説明すると、天照大神が、孫の邇邇芸命(天皇家の祖)(天津神サイド)に葦原中国を治めさせたいと言い、建御雷神を使者に出して、大国主神の息子の建御名方神(国津神サイド)が反対して戦い、諏訪へ敗走したという。

上社は山体を信仰対象としている一方、下社は神木を御神体とし、本殿を持たないが、代わりに2つの宝殿がある。片方は神輿が収められ、6年ごとに片方を建て替えるという形式をとっている。このことからいずれも古代の精霊信仰的な神社の原型がみてとれる。

御柱は宝殿の周り四隅に置かれ、右下から時計回りで一の柱から四の柱まで建てられている。丁度例大祭の日ということもあり神社では祈祷の準備が進められていた。分社も置かれていて、面白いことに建御名方神と戦った建御雷神を祭る分社も置かれていた。関係の深い神は敵であろうと祭るようだ。

また、それぞれ特徴のある木があった。秋宮には「寝泣きの杉」。丑三つ時に鳴き声が聞こえてくることからこの名がついたそうだ。春宮には「結びの杉」。先が二つに分かれながらも一緒の木であることからこう呼ばれている。

ちなみに我々が訪れた8月1日は下社で『お舟祭』という例大祭が行われていた。半年ごとに御神体を春宮と秋宮に移し替える行事があり、もしかしたらその様子が見られるかもしれないと思い行ってみると、我々が秋宮から春宮に移るタイミングで御神体が春宮から秋宮に移動してしまったので、二つの宮のどちらも御神体がない状態で参拝したことになってしまった。



【写真：秋宮二の御柱】



【写真：諏訪大社下社春宮】

※写真の撮影は全て坂本佳翼

〈参考文献〉

<http://suwataisha.or.jp/akimiya.html>

御柱祭り

文責：鈴木 統介

御柱は長野県諏訪湖で行われる祭りで、山中から御柱としてもみの大木を 16 本切り出し、長野県諏訪地方の各地区の氏子の分担で 4 箇所各宮まで曳行し社殿の四方に建てて神木とする祭である。この御柱祭りは 7 年目ごとに行われ、そのたびに柱を更新する。前回は 2016 年に行われた。次回は 2022 年 4 月に開催される予定である。氏子の祭りなので実際に参加はできないが、迫力満点の祭りの様子は見学可能。とくに、長さ約 100m の急な坂をすべり下り、冷たい川の中で大木を運ぶ様子は豪快で迫力がある。今年開催された御柱祭りは 2022 年 4 月に終わっている。

しかし、現地では「御柱よいさ」という御柱祭の魅力を映像や展示を通して感じる事ができる施設があり、御柱祭の曳行の移動ルートや、神木に乗って山を下り降りることを体験できる装置もあった。その装置を見ている限り、切り落とした御神木に乗り、山中を滑り下るといのはなかなか迫力があるものだった。



【写真：御柱祭の模擬体験の様子】

撮影：顧問 齋藤

<出典>

・ <https://shimosuwaonsen.jp/tourism/441/>

日本電産サンキョーオルゴール記念館すわのね

文責：福田 健人

「日本電産サンキョーオルゴール記念館すわのね」は、下諏訪駅から徒歩約 10 分の所のところにあるオルゴールの博物館だ。この博物館には、アンティークオルゴールが約 120 台展示されていて、オルゴールの歴史や仕組みを学ぶことができる。世界のオルゴールも展示されていて、エジソンの蓄音機や、国内で 1 つしかないドイツ製のアンティークオルゴールなどがあった。さらに、オルゴールを試聴することもでき、最近流行っている曲や jpop、クラシックなど約 700 種類楽しむことができる。オルゴールが誕生したのは 18 世紀末のスイスで、日本で広まったのは戦後である。戦前、製糸業で有名だった諏訪地区は、戦後の高度経済成長期になると、豊富で澄んだ水と空気があることから精密技術が集積し「東洋のスイス」と呼ばれるようになった。その中心となったのがカメラ、時計、オルゴールである。1946 年、国内で本格的なオルゴールの生産がスタートしたこの年、三協精機が創業してオルゴール作製への試行錯誤が始まった。1950 年代には月産数万台という量産ベースが実現し、世界シェアの 90%以上を占めた。オルゴール作り体験もできるので、是非訪れてみてほしい。



【写真：エジソン蓄音機】

撮影：福田健人

岡谷市概要

文責：安藤 隼太郎

岡谷市は長野県の中央に位置する都市である。また、面積は長野県内の市のなかで最小であり、人口密度は県内の全市町村のなかで最も高い。

1875年に岡谷市に諏訪式操糸機を導入した「中山社」が創業した影響で長野県は生糸の生産量が全国一位になるなど以前は製糸業で栄えたが、第二次世界大戦を背景に綺麗な水や空気などの恵まれた環境を生かし精密機械工業の中心地として栄え、今日では「東洋のスイス」とも呼ばれている。私自身が行って見た感想としては周りが山に囲まれていて、坂が多い印象を受けた。



【写真：JR 中央線岡谷駅】

撮影：顧問 齋藤

岡谷蚕糸博物館

文責：吉田 駿平

「シルクファクトおかや」は養蚕に関わる物の展示を行っている博物館である。岡谷市は上田市と共に製糸業にて栄えた場所である。館内には世界遺産に認定されている富岡製糸場にて使用されていたフランス式操糸機や日本で開発された諏訪式操糸機など、貴重な機械 3 万点程の機械・絹製品・資料が展示されている。2012 年までは岡谷市役所付近にあったが 2014 年 8 月に移転し現在の場所になった。岡谷蚕糸博物館はシルクファクトおかやという愛称がありファクトには「工場」と「事実を伝える」の二つの意味がかかっている。移転先の近くにあった宮坂製糸場も館内に移転しており、製糸の仕様の様子を見ることが出来る。宮坂製糸場は国内で唯一、人の手によって紡がれている。工場では糸の紡ぎ方を学べる場所や操糸機の動作や構造を学ぶことができる。また、蚕について書かれている場所も存在し蚕の生態、食べた葉が何かによって糸の品質が変わることが説明されていて、戦前から今に至るまでの養蚕業の歴史についての展示もあり、養蚕業が縮小していることや、かつてアメリカにて生糸の 93%を占め、輸入相手国第一位であったこと、戦後の日本経済の立て直しにおいて頼りになったことなども記されていた。



【写真：蚕の展示の様子】

撮影：部員



【写真：諏訪式繰糸機】

撮影：吉田 駿平



【写真：蚕の脱皮殻】

撮影：吉田 駿平



【写真：繭を保存する様子】
撮影：吉田 駿平



【写真：蚕の一生の図】
撮影：吉田 駿平



【写真：手作業での糸繰りを学ぶ部員達】
撮影：顧問 齋藤



【写真：機械による糸繰りを見学する部員達】
撮影：顧問 齋藤

岡谷の養蚕・製糸業関連遺産

文責：河合 道祐

・丸山タンク

丸山タンクとは、絹を作るうえで大変重要である水を貯えておくためのタンクで、1914年に作られたものだ。ここに貯えられる水は、約650m離れた天竜川からポンプで引かれて、このタンクの中で不純物を沈殿させてから各工場に供給されていた。総容量は50トンで約3500個の釜に対応できた。またここは昔、勾玉が発見されたこともあり、古墳だったともいわれている。実際行ってみると、このタンクは民家に囲まれた小高い丘の上にあり、階段を上らないといけないことから、古墳だったと言われればそのようにも見えた。このタンクはレンガでできていて、建設当時のまま残されていた。また、合宿前の下調べではタンクの中に入ることもできそうに思えたが、夏ということもあってか雑草が生い茂っていて、中に入ることはできなかった。

・金上繭倉庫

金上繭倉庫とは、後述する照光寺蚕霊供養塔のすぐ近くにある建物で、繭を購入してから糸を繰るまでの間、繭を貯蔵するための建物である。このような建物は昭和元年に岡谷市内に105棟あり、黒煙を噴き上げる千本の煙突とともに、岡谷市の象徴となっていたという。この倉庫は木造三階建ての土蔵からなり、蛾になる前に必要な繭の乾燥による火災を防ぐために白の漆喰塗り仕上げとなっている。この倉庫は、明治時代に建設されたサスダイ中村甫助製糸所の3階建ての繭倉庫で、昭和32年に株式会社金上が譲り受けて回収し保存されていたが、2022年7月にレコード店「セラーレコーズ」として生まれ変わった。また、この建物は長野県諏訪地域の製糸関連遺産にも指定されている。

・照光寺蚕霊供養塔

照光寺蚕霊供養塔は、長野県岡谷市本町にある真言宗の照光寺の境内にあり、1934年に当時の世界不況のあおりを受けていた製糸業の発展を祈り、製糸工場関係者によって建てられた、シルクの生産過程で死んでしまう蚕を供養するための塔である。ここには、蚕の神様である「蚕玉神」がまつられている。この塔が建設された4月29日には、蚕霊供養祭が営まれている。蚕霊供養塔は、日本の養蚕業発祥の地である神奈川県横浜市や茨城県、埼玉県にもあるが、これらは全て石造で、岡谷市の塔のように木造の堂塔建築による蚕霊供養塔は類例が少ない。

・旧林家住宅

旧林家住宅とは、明治9年に天竜製糸所として創業した一山カ林製糸所の初代所長、林国蔵の旧住宅のことである。林国蔵は開明社という製糸会社の年番社長をつとめ、生糸の品質管理システムを構築し、日本の製糸業発展の基を築いた。この住宅は主屋と離れの座敷、茶室、洋館に分かれ、主屋の南側には繭倉庫の形式をとどめる土蔵が並んでいる。このうち主屋には、彫刻界の派閥の一つである、諏訪立川流の彫工清水好古斎が制作した欄間彫刻などがあり細部まで手の込んだ和室となっていた。また離れには、西洋建築の壁に多用されていた5種類の「金唐革紙」が2階の屋敷の壁と天井のすべてに張り巡らせていた。現在は変色していたが、建設当時は全てが金色だったといい、一度はそのような部屋で暮らしてみたいと思った。さらに、離れとつながっている洋館には、来賓者をもてなしたといわれている4畳半の茶室が設けられている。この洋室には当時としては最新だったストーブや呼び鈴があり、一つの建物の中に和洋が混在している大変珍しい施設となっている。



【写真：丸山タンク】



【写真：金上繭倉庫】



【写真：照光寺蚕霊供養塔】



【写真：旧林家住宅(和室)と復元金唐革紙(小鳥手文)】

※写真の撮影は全て河合道祐

諏訪市概要

文責：安藤 隼太郎

諏訪市は、岡谷市と同じく諏訪湖のほとりに位置する都市であり、諏訪湖に隣接する工業都市であるとともに、諏訪湖や上諏訪温泉、諏訪大社の上社（本宮）、霧ヶ峰高原を抱える観光都市でもある。気候、地形や精密機械工業が盛んな点など、岡谷市と共通する点が多い。実際に行って見て下諏訪町や岡谷市より住宅地としての利用が多いと感じた。



【写真：市のシンボルである諏訪湖】

撮影：安藤隼太郎

上諏訪温泉

文責：遠藤 壮一郎

上諏訪温泉は諏訪湖東岸の温泉で、上諏訪駅付近から諏訪湖畔にかけて湧出していて、湧出口は500を超えている。旅館はもとより学校、官公庁、公共施設、一般家庭にまで配湯されており、湯量は1日約15000キロリットルにも及んでいる。上諏訪温泉の中の主な2つの施設を訪れた。

<諏訪湖間欠泉センター>

諏訪湖間欠泉センターの間欠泉は、かつて世界第2位の高さ50mまで自噴していたが、次第に自噴間隔が長引くようになり、やがて止まってしまった。最近まではコンプレッサーで圧縮空気を送り、上部の冷えた温泉を取り除くことで間欠泉を噴出させていたが、機械の故障により今は中止している。今は噴出口からの湯煙を楽しむことができる。



【写真：諏訪湖間欠泉センターの湯煙】

撮影：遠藤壮一郎

<上諏訪駅ホームの足湯>

上諏訪駅の一番線のホームには、昔は日帰り入浴可能な男女別の露天風呂があったが、今は露天風呂が足湯に改装されている。今は乗車券か入場券で利用できるようになっていて、電車の待ち時間に気軽に楽しむことができる。足湯の湧出量は1分あたり約8000リットルとなっていて源泉温度は54°Cから97°Cもあり、熱めの足湯である。



【写真：上諏訪駅ホームの足湯】

撮影：遠藤壮一郎

<参考文献>

- <https://www.city.suwa.lg.jp/site/enjoy/4441.html>
- <https://shinsyu-style.com/suwako-region/city-suwa/nn156/>
- www.suwako-onsen.com/points/
- <https://www.onsen-history.com/2887/>

高島城

文責：野口 琉也

高島城は、1598年、徳川家康の家臣である日根野織部正高吉により築城され、諏訪氏の居城としてその威容と要害堅固を誇ってきた。高吉が築城の適地とした高島は当時諏訪湖畔に島状を呈していたと思われる場所で浮島とも呼ばれ、ここには主に漁業を営む村落があったことが記録に残っている。

1970年5月に天守閣が復興され、その美しい姿を再び堀の水に映すようになった。天守閣にある高島公園は桜の名所にもなっており、また、四季折々の花が楽しめる。

高島城は水堀に囲まれており、冠木橋を渡って本丸のほうへ入っていった。石垣は野面積みという稜線だけ加工した石を用いる工法で組まれていた。また、この場所は諏訪湖に近く地盤が軟弱なため、大木で組んだ筏の上に石垣を積んでいた。外壁は一部木材でできていた。その木材の部分には狭間があったため、この狭間を見えづらくして侵入してきた敵を撃ち落としていたのではないかと考えた。また、天守本体には石落としがないため石垣から侵入してくる敵は想定していなかったのだろうと考えられる。そのため、いかに水堀の防衛力が高かったかが分かる。

中に入ると庭園が広がっていた。この本丸はもともと城主の御殿や書院、政務をとる御用部屋、郡方、賄方、能舞台、氷餅部屋などの多くの建物があつた。今は高島公園となっており、手入れがされていてとてもきれいだった。また、公園なので奥へ進むと滑り台やブランコなどの遊具があつた。そのため、大人だけでなく子供も楽しめる場所となっていた。そして、高島城天守前には折れ道の階段があり、これもまた敵の侵入を防ぐ仕掛けとなっていた。

高島城内は撮影禁止だったので写真は省略するが、中は博物館のようになつており高島城ゆかりの展示物が多くあつた。築城、藩主、藩政、藩士の四つのコーナーに分かれており、それぞれ関連する資料があつた。藩主が来ていた調度品や文芸作品、武具類、藩政に関する子分書類など高島城や高島藩の当時の様子が知ることができるような資料が展示されていた。

天守最上階から見る景色は下の写真のようになつており、直線の道が多かつたため天守からは城下町の様子が一望できたと考えられる。また、直線の道の途中でたまに折れているのは馬に乗った敵が攻めてきたときに本丸に近づきにくくするための防衛策だったと言われている。そして奥には諏訪湖が見えるようになつている。



【写真：高島城天守と冠木橋の様子】



【写真：天守前の階段】 【写真：本丸日本庭園(高島公園)の様子】



【天守最上階から望める景色】

※写真の撮影は全て野口琉也

<参考文献>

- <https://www.suwakanko.jp/takashimajo/>(最終閲覧日 2022 年 8 月 24 日)
- <https://skima-shinshu.com/takashima-castle/>(最終閲覧日 2022 年 8 月 24 日)

松本市概要

文責：安藤 隼太郎

松本市は、長野県の中央から西部に位置する、県内第二の都市である。また、周囲を3000m級の標高の高い山地に囲まれている影響で、年間を通して湿度が低く、年間降水量も少なく晴れの日が多い、日本でも代表的な内陸性気候・中央高地式気候の都市である。

以前までは国宝松本城を中心として栄えた城下町で、現在は住宅街、観光都市としても栄えている。実際に私自身が行った感想としては、駅前に多くのホテルやデパートがあることやバスのロータリーが広がったので中心部は人口以上に栄えている印象を持った。

しかし、松本市内には今回の合宿では足を踏み入れている岐阜県と長野県の県境の飛騨山脈も所在していることや、県内の市では面積が1番広い市であることから都心部と山間部によって見られる光景が変わる都市だと思われる。



【写真：市のシンボルである松本城】

撮影：安藤隼太郎

松本城

文責：坂本 佳翼

松本城は、長野県松本市にある平城である。現存する五重六階天守は 1593～4 年にかけて建てられたとみられる。これは恐らく現存最古で、国宝に指定されている。

松本城の創始は戦国時代の初め頃、信濃の守護小笠原氏は、元々は現在の松本駅の南側にある井川に居を構えていたが、家督争いともいわれる戦乱の中で館を東の山麓に移し、その際に家臣らが守護のため築いた林城の一つが松本城の前身、深志城である。その後は武田信玄が小笠原長時から占領した後、本能寺の変の後に小笠原長時が再び回復し、松本城とした。この頃、天守閣はまだなく、天守の創建は豊臣秀吉が天下統一を達成した後、松本城主として封じられた石川氏の治世であるとされている。城と言っても天守閣だけではない。城下町の整備もこのころに行われた。この話はまた別のページで取り上げられているはずなのでそれもお覧いただきたい。

このように歴史の古い松本城であるが、本丸広場、天守閣内部に入るには高校生以上は 700 円と、国宝を直接見に行けると思えば安いものだ。本丸御殿は 1727 年に焼失したため跡地しかなかったが、ここに来た大多数の人の目的は天守閣。入口から急な階段（一番急なところは約 60 度）を上って行くと、中にはその階の説明や火縄銃や甲冑など展示物も数多くあり、所々足を止めて写真を撮る人も多くいた。この天守閣最上階からの光景は、下の写真のように、松本の山々と街並みが一望できるようになっている。夏休みの繁忙期で観光客は多く、ゆっくり眺望を楽しむことは出来なかったが、外から見ているだけでも十分満足することができた。



【写真：松本城天守閣】



【写真：松本城天守閣からの眺め】

※写真の撮影は全て坂本佳翼

〈参考文献〉

- ・ <https://visitmatsumoto.com/spot/matsumotocastle/>

松本城城下町

文責：榎本 眞鑑

合宿最終日に地理部一行は松本城の城下町一带にある縄手通りと中町通りを訪れた。

<中町通り>

中町通りはもともと問屋が並んでいたが明治ごろの大火により多くの家屋が焼失した。そのため、大火の後には燃えにくい土によって造られた土蔵の蔵が並ぶようになった。蔵は白と黒の「なまこ壁の土蔵」でとても簡潔なデザインである。また、この通りは善光寺に行くための手段としても栄えた。下の写真のように、実際に行った中町通りの写真である。昔ながらの雰囲気を感じることのできる街並みであった。店の多くは伝統工芸品を販売する店や飲食店が多かった。

<縄手通り>

縄手通りは縄のように細く長い土手であったことから名づけられ、明治 12 年に建立された四柱神社の参道としても栄えた。また、この通りにはもともとカジカ蛙が生息していたが一時期、川が汚れたことによって蛙がいなくなり通りの活気も失われた。それによって以前のような活気を取り戻すために通り一带の人が一丸となって蛙を祀る取り組みを始めた。その取り組みの一部である蛙の彫刻や銅像を見ることができた。この通りは、静かでとても長閑な雰囲気だった。また、縄手通りの終着点付近には四柱神社が建っていて、大きな鳥居が目印となっている。



【写真：四柱神社】



【写真：中町通り】



【写真：縄手通】



【写真：カエルの木像】

※写真の撮影は全て榎本眞鑑

信州そば

文責：川合 励

信州そばとは長野の郷土料理である。長野県といえば信州そばというほどに、そばは長野県の代表的な郷土食である。はじめは、そば粉を水や湯で溶いたものを茹でた「そばがき」が一般的だった。ハレの日のもてなしとして「そば切り」（細く切られた現在のそば）が登場したのは江戸のはじめ頃である。（その発祥の地は諸説あり）

『毛吹草』（1645）には「そば切りは信濃国の名物。当国より始まる」との記述が見られる。『本朝文選（風俗文選）』（1706）には「蕎麦切りといっぱ、もと信濃ノ国本山宿（長野県塩尻市）より出て、あまねく国々にもてはやされける」とあったり、あるいは『塩尻』（1704～1711）には「蕎麦切りは甲州（山梨県）よりはじまる」と書かれたりしている。ちなみに、本山宿は中山道木曾路の入口に位置する宿場町であり、今でもそば切り発祥の里として、そばの栽培からそば打ちの技術まで、受け継がれている。郷土食として根付いたのは、理由としては各地でそばが栽培されてきたことがある。冷涼な気候や狭い土地など、米や小麦が栽培しづらい高冷地に適した農産物として育てられてきたのがそばであった。その始まりを調べると多く登場するのが山岳修験道の修行僧が携行食としていたそばの実を村人に伝え、栽培方法とともに広がったという伝説が各地に残っていることがわかる。

信州そばにも様々な種類があり、日本三大そばの一つ「戸隠そば」、そばの実の中心部分だけを使った「更科そば」、さわやかな苦みのある「だったんそば」、焼きみそや辛味大根を添えて食べる「行者そば（ぎょうじゃそば）」、さらには「霧下そば」や「すんきそば」「とうじそば」などがある。一般的な信州そばの作り方としてそば粉と小麦粉を混ぜ、水を加えて、水回し（水をまんべんなくいきわたらせる）、こね、のぼし、切りという工程を経て作る。また、信州そばと名乗ることができるのはそば粉が40%以上使われているものだけだという。



【写真：合宿中に食べた信州そば】

撮影：川合 励

信州味噌

文責：長谷川 仁

日本で作られている味噌の内、長野県味噌工業協同組合連合会に加盟している味噌メーカーによって長野県内で製造されている味噌のことを、特に「信州味噌」という。

味噌は原料の一つである麴の種類によって、米味噌、麦味噌、豆味噌などに分けられているが、「信州味噌」はその中でも米麴と大豆味噌と塩を原料とする代表的な米味噌である。もともとは他の味噌と比べて辛口なのが特徴であったが、最近では甘い味噌が好まれているため乳酸菌を使用するなど、ニーズに合わせて少しずつ風味は変化している。また、光沢のある山吹色の味噌が、より良質な「信州味噌」とされている。

「信州味噌」の歴史は古く、始まりは鎌倉時代の僧侶・心地覚心が宋に渡った際に習った味噌の製法を、帰国後に布教と共に広めたことだと言われている。その後、武田信玄が兵糧の目的で味噌を作らせたことで、信濃国に味噌作りが普及した。それからしばらくは信州地方内での使用が主であったが、1923年の関東大震災で甚大な被害を受けた東京に向けて救援物資として「信州味噌」を送ったところ、これが好評を博し、全国に広がっていった。以降は全国に「信州味噌」が発展していき、現在では年間の出荷数量が20万トンを超え、全国シェアの半分以上を占める、日本トップの味噌となっている。

株式会社竹屋はこの「信州味噌」を150年前から製造している味噌製造メーカーで、一般的には「タケヤみそ」の名前で親しまれている。創業は1872年であるが、味噌専門メーカーとなったのは1939年である。戦後に「株式会社竹屋」となり、他のメーカーより早くスーパーマーケットで袋入りの味噌を販売、テレビCMなどの広告も積極的に展開するなどした。余談にはなるが、1993年からの1年間放映されていたNHKの連続テレビ小説は信州の味噌屋の一人娘が主人公のものであったが、タケヤみそはこれに味噌技術指導として協力していた。

タケヤ味噌会館は株式会社竹屋とその諏訪工場に隣接する施設で、タケヤ味噌やそれをもとにした食品や信州味噌に関連したオリジナル商品などの販売などを行っている。また、ごまみそソフトクリームやオリジナルの合わせみそを使用した豚汁などを食べることも出来る。

おやき

文責：水谷 颯

おやきとは、信州の代表的な郷土料理で、縄文時代の遺跡から粉を練って焼いた跡が発見されたことから、一説には信州おやきのルーツは長野市西北部とその周辺にあるといわれている。特に信州の山間部では小麦が多く栽培されたこともあって、信州独自の「粉食文化」が育まれてきた。小麦粉やそば粉を水で溶いて練った生地、野菜や山菜などの具を包んだおまんじゅうのようなものをおやきと呼ぶ。作るときは焼く、蒸す、揚げ焼き、焼いて蒸らすなどのさまざまな作り方がある。具も、あんこや野沢菜、山菜など多くの種類がある。コンビニやスーパーで販売されているが、10個入りや20個入りなど売られている数が多かった。駅から離れたおやき専門の店では10種類以上のおやきを販売していて、1つずつ販売されていた。駅から離れた店は自家製で作りたてが食べられる店も多い。中身は同じでも調理方法が違くと食感も違っていた。店のホームページでは作る様子の写真が載っていたりするので、調理過程も見ることができる。合宿で行った下諏訪・岡谷などの駅ではおやきを売っている店は多くなかったため、中規模の駅周辺でおやきを探すときは事前に調べることをおすすめだ。特に多く売られていたのは長野県を中心に信州地方の松本駅や長野駅などの大きい駅の近くや駅直結のショッピングモールなどで販売されていた。価格は1個あたり200-300円で、10個では2500-3000円で売られている店が多かった。

山賊焼

文責：田畑 裕理

山賊焼とは、長野県中信地方で広まった郷土料理のことを指し、この「山賊焼」という名前とは裏腹に鳥のもも肉(主にニンニク醤油)をタレに漬け込み、片栗粉をまぶして”揚げる”料理です。

名前の由来は諸説あり、1つ目が山賊の傍若無人なイメージを、一枚肉を使った豪快な料理になぞえられたという説。2つ目は山賊が物を”とりあげる”事と、”鳥を揚げる”料理をかけた事が由来とする説の主に2つがある。

今回の合宿の二日目の夕飯で山賊焼を食べる機会があったので食レポをしてみると、味は唐揚げのような味だがそのボリューム感は凄まじくとても満足感があった。このことを踏まえると、いかに山賊焼が中信地方で愛されているかがわかる。



【写真：松本市内で実際に販売されている山賊焼テイストのお菓子】

撮影：田畑 裕理

上記の写真は私が合宿中に撮影したお菓子である。このように松本市を含む中信地方でいかに山賊焼が愛されてきたかがわかる。

旅行記 1日目

文責：長谷山 悠斗

新型コロナウイルスの影響で3年ぶりとなった今回の合宿は、新宿から特急あずさ5号に乗り上諏訪へ、そこから中央本線に乗り換えて訪れた下諏訪の街を調査することから始まった。歩くこと約15分、はじめの見学地である諏訪大社下社の秋宮を見学した。国歌でおなじみのさざれ石や、秋宮の御柱を見ることができ、厳かな雰囲気を感じることができた。敷地内にある翡翠おみくじを引いてみたところ、小吉という実に中途半端な結果に終わったが、隣で部員の市川がしれっと大吉をひいていてとても羨めた。春先に清水寺で凶を出しているの、それと比べればマシだととらえることにした。次の見学は、日本電産サンキョーオルゴール館と星ヶ塔ミュージアムの二手に分かれていった。僕が見学したのは後者のほうであり、特に印象に残っている、中国で作られた大型天文観測時計を復元したものは、2階建ての時計の内部に入って実際に動く様子も見ることができた。諏訪湖のあたりは空気が澄んでいたために昔から精密機械工業が発展し、多くの時計が作られてきたのは全国的にも有名である。星ヶ塔ミュージアムをあとにし、二街道の合流点・下諏訪本陣を訪れると道路に下のような目印があった。右に行けば旧甲州街道、左に行けば旧中山道である。街道の合流点というだけあって昔は宿場町として栄えていたようだ。次の見学地である諏訪大社には、旧中山道を歩いて向かった。20分ほど歩いて春宮につき、立派な御柱を見た後、近くにそこそこ大きな川があったので、そこで少し休憩をした。真夏の川に足を突っ込んでみると、もう爽快。ただし、何も考えていなかったせいで若干ズボンを濡らし、岩でスマホの画面を傷つける失態を犯してしまった()。そんなこんなで次に御柱館よいさを見学した。じゃんけんに勝ち、おんばしらに乗って坂を下るシュミレーションをさせてもらった。ほかにも歴代のポスターなど御柱に関する展示物が多くあり、非常に見ごたえがあった。

見学後、下諏訪駅まで歩いて戻り、松本でホテルのチェックイン、夕食を済ませた。1日目の全体での活動は以上である。

旅行記 2日目～岡谷班～

文責：榎本 眞鑑

2日目は岡谷駅周辺を巡った。午前には岡谷蚕糸博物館に行った。博物館では養蚕に関わる機械や製品、資料が展示されていた。実際に機械の体験や作業の見学をすることができた。また、博物館内には蚕の幼虫を間近に見たり触ったりできるところがあり非常に楽しく過ごすことができた。蚕の幼虫はかなり可愛かった。午後からは上諏訪班と別れて、岡谷市の養蚕・製糸業関連遺産を巡った。

まず、初めに丸山タンクに向かった。丸山タンクではタンク周辺に草木が生い茂っていたため、半ズボンで行った私は近くまで行って見学することができなかった。

次に向かったのが金上繭倉庫である。この倉庫は繭を貯蔵するために建てられた倉庫で昔風の土蔵だった。見学した時はレコードショップとなっていた。

金上繭倉庫の次に向かったのは旧林家住宅である。この住宅は製糸所を創業した林国造の旧住宅である。この住宅の内装は隅々まで高度な技術を用いており凄い一言に尽きる住宅だった。特に欄間の装飾は細部まで施されておりとても印象に残った。また、昔ながらの和洋折衷の内装も印象に残った。例えば、床の間や廊下、客間は和風な雰囲気だったが、玄関ホールなどは洋風な雰囲気だった。

旧林家住宅を見学した一行は天竜川沿いを歩き釜口水門に行った。釜口水門は諏訪湖と天竜川の区切れ目となっている水門のことである。また、水門は舟通し水門という天竜川もしくは諏訪湖の水位のどちらかに水門内の水位を合わせて行き来する特徴を持っている。水門からは湖畔と川の景色を一望することができた。

その後、時間が余ったため、2駅先である上諏訪駅まで電車で移動し、上諏訪駅構内にある足湯を楽しみ、そこで上諏訪班と合流した。



【写真：蚕糸博物館内の蚕】



【写真：金上繭倉庫】



【写真：旧林家住宅玄関ポーチ】



【写真：旧林家住宅 座敷】



【写真：旧林家住宅 欄間】



【写真：釜口水門】



【写真：天竜川】



【写真：諏訪湖】

※写真の撮影は全て榎本眞鑑

旅行記 2日目～上諏訪班～

文責：市川 洗太

信州松本の爽やかな朝日と共に目覚めた、僕こと市川洗太は、ホテルのバイキングでそばや、りんごジュース、野沢菜の漬物などの長野名物で1日分の活力を蓄えていたというのも、我が地理部の夏合宿は2日目を迎え、山場に突入しようとしていたからだ！



【写真：ホテルの朝飯。厚焼き玉子が美味しかった。】

この2日目は午前中、全員で岡谷に向かい、午後は、岡谷にとどまる班と上諏訪に向かう班の2つに分かれて見学をするという予定になっていた。この旅行記は、午後に上諏訪に向かい、諏訪湖や間欠泉センター、みそ会館などを訪れた班のものとなっているが、岡谷班のものも是非読んでみてほしい。また、この旅行記というものは、かなり真面目なレポの中で多少のおふざげが許された、いわば治外法権が適用されているような特別区域であり、箸休めとして読むもあり、とりあえずここだけ読むもありと、気軽に読んでほしく思う。前座はこれくらいにして、早速本題に移る。

松本駅から中央本線に乗って25分ほど、岡谷駅に到着し、まず向かったのは「岡谷蚕糸博物館」だ。ここでは貴重な昔の製糸機や、当時の手法で生糸を紡ぐ様子を見学することができる。また、生糸を生産するうえで欠かせない蚕を、見たり、触ったりすることもできた(苦手な方もいると思うので写真は載せません……)。ガイドさんの解説を聞き、お土産屋さんで絹の生地を使ったうちわを買ったところで、岡谷駅に帰還。駅周辺でお昼ご飯を食べ、先述した通り、僕たちは上諏訪へ向かった。



【写真：当時の工場を模した外観の岡谷蚕糸博物館】【写真：生糸を紡ぐ様子】



【写真：明治時代に日本で作られた製糸機】

上諏訪に着いてまず向かったのは「高島城」。豊臣秀吉の家臣である日根野高吉が1598年に築城し、関ヶ原の戦いの後、1601年から明治維新まで諏訪一族が居城とした城だ。この城は、かつては諏訪湖が城の周りを囲み、堀の役割を果たしていたため、「諏訪の浮城」と呼ばれ、その堅固さを誇っていた。



【写真：高島城】

見学を終え、高島城を後にした上諏訪班一行が次に行かんとするのは諏訪湖の「湖畔公園」。長野県の中央に位置し、「御神渡り」でも有名な諏訪湖の湖畔でしばし休憩。雄大な諏訪湖の湖畔ではゆったりとした時間が流れていた。



【写真：諏訪湖畔】



【写真：水鳥を眺める、副部長 長谷山君】

諏訪湖を眺めた後は、上諏訪温泉の温泉街を通過、「諏訪湖間欠泉センター」へ。ここでは盛大に噴出する間欠泉が見られると思っていたところ、どうやら現在は噴出が止まってしまっているようだ。少し残念に思いながらも、2階の諏訪湖で行われたロケ地の展示を見ることにした。諏訪ではその豊かな自然を生かして、NHKの大河ドラマの撮影などが行われているようだ。また、3階では諏訪湖花火大会の展示を見ることがで

きた。毎年夏に行われるこの大会では、合計4万発以上の花火が打ち上げられ、その規模は国内最大級ともいわれるそうだ。間欠泉センターの次は、「たけや味噌会館」へ。信州味噌で有名な長野は、味噌の生産が盛んで、この味噌会館では、味噌を購入したり、ごまみそソフトクリームを食べたりできる。この日はとても暑かったこともあって、ごまみそソフトを食べてみた。どんな味がするのかとっていると、ゴマや味噌の風味はしつつも、適度な甘みがあって予想以上に美味しかった。外に出て歩きながら食べたところ驚異的なスピードで溶け、全速力で食べざるを得なかった。



【写真左：かつて実際に打ち上げられた花火の模型 with 長谷山君】

【写真右：ごまみそソフトクリーム】

予定していた見学地をまわり終え、上諏訪駅へ向かう。実はこの上諏訪駅、ホームに足湯があるのだ！ホームに入りさえすれば、足湯自体はタダ。岡屋班とも合流し、程よい温度の温泉で1日の疲れを癒した。そして、その後ホテルに帰った地理部は、夕飯を済ませ、2日目の行程を無事終えたのだった。

しかし、時刻は19時過ぎ。まだ消灯の22時まで時間がある！と僕とゆかいな仲間たちは、松本での新たな冒険を求めて旅立つ……！



【写真：お馴染み長谷山君と著者近影】

【写真：反対側のホームから見た足湯】

～松本電鉄上高地線編～

せっかく松本に来たことだし、ローカルな電車に乗りたいと思い、松本～新島々(しんしましまって口に出して読みたくなるね)間を走る「松本電鉄上高地線(上高地には行かない)」に乗車してみることに。雰囲気を感じたいだけなので、1駅先の西松本まで乗ることにしたのだが、この上高地線、都心の電車とは乗り方がかなり異なる。どうやら、松本以外の駅では改札を使わずに、電車内で料金を支払うようなのだ。説明が難しいのだが、路線バスのような乗り方だと思っていたら概ね正しいはずだ(というのも、僕自身、この1回だけでは仕様を理解しきれなかった……)。慣れない乗り方に戸惑っていると、2分もせずに目的地、西松本についてしまった。この駅に改札はないので、電車内にある料金箱で運賃を支払い、下車。



【写真：アルピコ交通上高地線】

松本市街地から少し離れるだけでのどかな風景が広がる。地元の雰囲気を感じたところでホテルに帰り、お風呂も済ませて、寝る……前に、ホテルのサービスでお茶づけを食べて小腹を満たした。お腹一杯になり、疲れ切った僕は眠りにつくのだった。



【写真：ホテルのお茶づけ】

※写真の撮影は全て市川洸太

旅行記 3日目

文責：平塚 雅人

どうも、中3新入部員の平塚です。皆さんにはまだ覚えてないと思うので軽く自己紹介をします。僕は少林寺拳法部から来ました。ご想像通りめちゃくちゃ練習がきつくてやめたのですが、なんかいい部活ないかなあと探していたところ榎本君が誘ってくれた、せっかくならということでも中3の仲がいい友達を連れて入りました。これから地理部を盛り上げていきたいと思っているので先輩方、どうぞよろしくお願ひします！あと、話すことが好きなのでぜひ！話しかけてください！

ということで、旅行記スタートです。

3日目の朝、私はよく寝た。いや、寝すぎたのである。起きてスマホを開くと、そこには、9:30という数字が書かれていた。今日の集合時間はそう、10:00である。部屋代表ということもあり、自分の支度だけでなく皆の忘れ物がないかなどチェックしていた。ご察しの通り私は朝食を食べることができなかったのである。(他のメンバーも寝坊したため急いでいたが朝食はなんとか食べることができたという。)まあしょうがないということで我々は松本城へ向かった。

松本城へ向かう際、城下町の三の丸を通った。そこには昔上級武士が住んでいたそう。確かにきれいな街並みで立派な建物も並んでいたのも、当時どのくらい栄えていたかを知ることができた。そしていよいよ松本城に着いた。ぱっと見の感想はとてもでかかった。というのも、2日目に高島城に行ったのだが、スケールが全く違った。そしてやはり形が綺麗だった。さすが現存12天守だなと思った。そのまま天守に登ったのだが、ほぼ当時の状態のままだからかとても階段が急だった。当時の武士や将軍はこれを日常的に登っていたのかと考えると少し辛そうだなあと考えた。他にも展示物には火縄銃や大砲、日本刀などがあり厨二心を少しくすぐられた。また、石落や狭間といわれる、隙間から矢を撃つったり石を落としたりする罠がそのまま残っていた。当時の人が城を攻略する時、こんなえげつない罠があったらと思うとかわいそうになった。そんなこんなで一番上の階に到着し、窓を見るととても高く景色がよかった。



【写真：松本城】

【写真：松本城から見た景色】

その後天守から降りて 30 分くらいベンチで涼んでいた。というのも外が暑すぎるのだ。おそらくこの 3 日間で飲み物代に 1500 円以上はつかっている。(特に 2 日目はとても歩いたのでしんどかった。)なので呑気にアイスでも買って皆で食べていた。

次に下級武士の高橋家の家が残されている場所に向かった。向かう際には、鍵型道路と言われる迷路みたいな道を通った。案の定、先頭を歩く斎藤先生を追いかける形となった。下級武士の家は中までは見るができなかったものの、外見からは少し狭そうだなあと考えた。



【写真：高橋家の家】

ようやく昼飯になったが、店を探すのが面倒くさく、何人かとコンビニで買って食べた。せっかくだからと二の丸で食べて休憩した。急だが、それにしても長野の女子はかわいいなあと考えた。というのも休憩中、特にやることがなかったのでスマホゲームを

していたのだが、それにも飽きてしまい道行く女子達を観察するという寄行に走ったのである。1日目から思っていたのだが長野の女子はかわいい女子が多い。私は思わず長野女子、いや長野に心を持っていかれたのである。そんなこんなで休憩時間が終わった。また歩くのかと思うとなかなかやる気が出ない…。これでも元運動部なのだが、断然地理部のほうがきついことを思い知った。

次に上級武士の新井家の家の門だけが取り残されているところに行った。とても広い敷地で贅沢な門だなあと感じた。



【写真：新井家の門】

※写真の撮影は全て平塚雅人

次に土塁の実物大の石がある公園に行った。土塁の高さは3.5メートルでその上に2.5mくらいの塀が立てられていたらしい。土塁に登って飛び降りようとしたが流石に日和った。あと、関係ないがアリとハチがめちゃくちゃ沸いていた。土塁から降りた後体は何匹もアリがくっついていて気持ち悪かった。流石長野…。

最後に、中町通りと縄手通りに行った。この道をずっと行くと善光寺があるよと言われたので頑張って行こうと思ったが無理があった。しかし街並みを見ているとお土産屋さんなどがたくさんあった。中にはとてもおいしいそうな長野県産のフルーツや、有名どころだと、おやきやそば、味噌などが売られていてどれも欲しいなあと考えた。

ようやく3日目の巡検が終わった。帰りも特急あずさで帰ったが、皆行きはめっちゃ元気だったのに、帰りは力尽きたのか疲れて寝ていた。朝食抜きで昼飯もコンビニ飯だったので、お腹が空いていて寝ることができなかったのは私だけだろうか。

以上で旅行記は終わりです。めっちゃ疲れましたが、その何倍も楽しめたので良かったです！中3は大町がなかったので宿泊行事をまだ1回もできていませんでしたが、部活の合宿でできて本当に嬉しいです。皆さん本当にお疲れさまでした！

第二章

東京湾西岸の考察～謎解き巡検 (2022年3月30日)



謎解き巡検カード 一覧

作成：顧問 齋藤

巡検ルール

1. 2班に分かれ，東京駅丸の内南口を10時に出発。
2. 巡検カードに書かれた場所を見学し，MISSIONを遂行。
3. 撮影した写真をLINEにアップ。
4. 全てのMISSIONをクリアし，時間までに指定の場所へ到着。

GOAL：羽田空港第1ターミナル展望デッキ

TIME：17時

黒船襲来!!

この地は江戸を守るための設備として建設が始まったが，資金難で頓挫。その跡を利用して昭和初期に埋め立て開始。現在は再開発が進み，オフィスビルが建ち並ぶ。ピントラス構造の橋がこの地のシンボルだ!!

【MISSION】

高層ビル群を背景にドラマのロケ地によく使われるこの橋を撮影しよう!!

巨大生物出現!!

江戸の町は大慌て。その評判を耳にした徳川家齊までもが上覧したとか。この地にある神社の境内にはその巨大生物の供養塔がある。神社の位置から当時の海岸線を知ることが出来るぞ!!

【MISSION】

神社を参拝し，巨大生物の名が刻まれた供養塔を撮影しよう!!

ペリー再び!!

この地に下屋敷を構えていた土佐藩は、黒船再来に備えて警備を強化。屋敷内に砲台を構えた。若き日の坂本龍馬もその警備に就いていたとか。龍馬が見つめるその先に今も堂々たる存在感を示している!!

【MISSION】

坂本龍馬と並んで一枚、砲台を囲んで一枚、写真撮影しよう!!

高級品と評された江戸前の特産物!!

この地では戦中まである水産物が養殖され、江戸期から続く伝統産業になっていた。しかし、戦後の埋め立てにより1963年終焉。しかしその技術は日本全国に受け継がれた。この地に建てられた館で伝統文化や歴史を学ぼう!!

【MISSION】

施設をしっかりと見学して、かつての養殖のようすの学習と撮影を!!

日本の大動脈を支える!!

1964年、世界初の高速鉄道が開業。ハイスピードの安全運行を支える施設がこの地に建設された。何十両もの車両が休むこの地では、運がよければ黄色いお医者さんに会えるかも!!

【MISSION】

車両が並ぶ広大な敷地を背景に写真を撮影しよう!!

国際貿易の要!!

日本には多くの貿易港があるが、東京港もその一つ。その中核となるこの地はコンテナの取扱量が日本一。日本と世界との貿易の拠点になっている。埠頭にはたくさんの「鉄の麒麟」が並んでいるぞ!!

【MISSION】

三角形の公園の展望台から港の様子と「鉄の麒麟」を撮影しよう!!

CO₂削減に貢献!!

日本の物流はその6割以上を自動車が支えているが、環境問題への対策からモーダルシフトの取り組みが進められている。その一つが鉄道を利用した物流。この地は日本全国へ物資を運ぶ列車の始発駅だ!!

【MISSION】

積み込まれるたくさんの荷物と列車を背景に写真を撮影しよう!!

地域を守る氏神様!!

江戸期には遠浅の干潟だったこの地を守るため稲荷大神を祀ったこの神社は、戦後の埋め立てと空港建設で現在地に移転。しかし、神域の入口、大鳥居だけは長らく移転されなかった。移そうとすると祟りがあったとか、、、

【MISSION】

現在の社殿を参拝し、空港に残された大鳥居を撮影しよう!!

もう一つの「台所」!!

「東京の台所」と言えば豊洲。でも豊洲は水産物中心。この地は野菜，果物などの青果物と花が中心。その取扱量はなんと日本一。日頃食べている野菜や果物はこの地で取り引きされたものかもね!!

【MISSION】

コロナ対策で見学が出来ないため，正面入口で写真を撮ろう!!

自然環境の再生!!

人工的に改変されてしまった東京港でも自然回復しているところが!?「江戸前」の海が再生したこの一帯は海辺や干潟の生物が生息するだけでなく，多くの渡り鳥の中継地点にもなっている。

【MISSION】

ネイチャーセンターで再生した「江戸前」の海の観察&撮影を!!

利田神社

文責：遠藤 壮一郎

利田神社は、江戸前期に沢庵和尚が弁財天を祀ったことが始まりと言われている。もともとは旧目黒川の河口の海に突き出た砂州に祀られた弁天社で、江戸名所図会や歌川広重の浮世絵にも描かれている。また当初は、洲崎弁天と呼ばれていたが、この一帯が南品川宿の名主・利田吉左衛門によって開発されて利田新地と呼ばれるようになり、明治時代になって利田神社という名前になった。

利田神社には鯨塚と呼ばれる石碑がある。鯨塚の鯨は、寛政10年(1798年)5月1日、前日からの暴雨風で品川沖に迷い込んできた鯨で体長約16・5メートル、高さ約2メートルもあった。猟師町に住む漁民たちはこぞって船を出してこれを天王州に追い込み、ついには浜に乗り上げたところを捕獲した。この大鯨捕獲の報はまたたくまに広がり、人々はひと目見たさに品川沖に集まってきた。さらに、評判を聞いた将軍徳川家斉も浜御殿で上覧することが決まり、鯨に縄を掛けて舟で浜御殿まで引っ張っていた。将軍は大層喜び、漁民に『猟師町元浦』という旗を贈った。この上覧によってさらに鯨見物は熱を帯びたのだが、長い間の係留で鯨は弱っており、その後死んでしまった。死骸は解体されて脂を取られた。胴体部分は41両ほどで落札された。そして残った頭骨は、当時の洲崎弁天の境内に埋められ、その上に塚が建てられた。こうして「寛政の鯨」と呼ばれる珍事は幕を下ろしたが、現在でも利田神社の境内の片隅に、都内唯一の鯨供養碑ということで塚が残されている。その周囲には鯨を模したモニュメントや遊具などが置かれている。



【写真：利田神社】



【写真：鯨塚】

撮影：遠藤 壮一郎

〈参考文献〉

- ・利田神社・鯨塚 しながわ観光協会

<https://shinagawa-kanko.or.jp/spot/toshidajinja/>（最終閲覧日：4月17日）

- ・利田神社鯨塚 日本伝承大艦

<https://japanmystery.com/tokyo/kagata.html>（最終閲覧日4月17日）

- ・しながわ広報平成19年（2007）7.1 第1637号

<https://www.city.shinagawa.tokyo.jp/ct/other000002500/kouhou20070701.pdf>
（最終閲覧日4月17日）

坂本龍馬像・浜川大砲

文責：吉田 駿平

坂本龍馬像は京急電鉄立会川駅から徒歩で約1分の位置(品川区東大井)に立てられている。以前は2004年に高知市より寄贈されたプラスチック製の像であったが、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」の影響によりブームが起こり、立会川を訪れる観光客が増加したことで、2010年に京浜ロータリークラブを中心とした地元の有志がブロンズ像を作成した。この像は、坂本龍馬が19歳の時に浜川砲台の警備のため立会川にいたという説を基にして、20歳の坂本龍馬を像にした。その為、他の龍馬像とは違い、ブーツではなく草履を履いており全国的にも珍しい像となっている。

今回はこの像の近くにある浜川砲台も訪れた。この砲台は、現在の立会川と勝島運河の合流地点である東京都下水道局浜川ポンプ場の南側にかつて土佐藩の屋敷があり、ペリ一來航後の1854年に立会川河口左崖に砲台が設置された。現在、新浜川公園に設置されている浜川砲台は復元されたものであり、当時設置されていた砲台は8基ありそのうちの一つである「30ポンド6貫目ホーイッスル砲」が原寸大で復元されている。これは品川龍馬会を中心にした地元の人々が資金を集めて造り、区に寄贈されたものである。



【写真：坂本龍馬像】

撮影：吉田 駿平



【写真：浜川砲台跡】

撮影：吉田 駿平

<参考文献>

<https://shinagawa.keizai.biz/headline/1146/>

<https://shinagawa-kanko.or.jp/spot/hamakawahoudai/>

大井車両基地

文責：河合 道祐

大井車両基地とは JR 東海管轄の東京都品川区八潮にある車両基地のことである。車両基地とは車両を収容するための場所かつ操車場としての機能と車庫の機能を併せ持ったものを指し、日本全国各地に多数存在する。大井車両基地は、1973 年 9 月に山陽新幹線の開業に伴う車両の増加に対応するために開設されたもので、東京仕業検査車両所・東京修繕車両所・東京交番検査車両所・大井保線所・東京統括電気所・大井電気技術センター・新幹線エンジニアリング東京支社などの施設があり、主に東海道新幹線の車両の留置・仕業検査・修理などを行っている。敷地面積は約 40 万㎡で、かなり広大だ。この車両基地のすぐ近くには、JR 貨物が管轄する東京貨物ターミナル駅や東京臨海高速鉄道が管轄する八潮車両基地が併設されており、巡検で訪れた際には、新幹線電気軌道総合試験車(通称ドクターイエロー)を含む5台の新幹線と多数の貨物列車が留置されていた。(貨物列車は東京貨物ターミナル駅内)

この車両基地は東京モノレール大井競馬場駅から徒歩 16 分ほどで行くことができ、一般公開はされていないが、真ん中を通る大井中央陸橋から見下ろすことができる。近くには、大井ふ頭中央海浜公園や首都高速大井ジャンクション、東京港野鳥公園、東京都中央卸売市場、みなとが丘ふ頭公園などがある。



【写真：大井車両基地(大井中央陸橋から撮影)】

撮影：河合 道祐

〈参考文献〉

[https://www.weblio.jp/content/\(2022-04-01 閲覧\)](https://www.weblio.jp/content/(2022-04-01%20閲覧))

東京貨物ターミナル駅

文責：水谷 颯

東京貨物ターミナル駅とは、東京都品川区八潮にある JR 貨物の駅である。旅客列車の設定はないが、JR 東日本の駅として扱われている。1 年間に約 8600 万トンのコンテナを輸送し日本一の量を誇っている。東海道本線(東京～神戸)を中心に、札幌、吹田(大阪)などから隅田川貨物ターミナルと並び東京都の二大貨物ターミナルである。面積は日本の貨物ターミナルで最も広く、縦 3600m、横 600mの敷地にある。隣には、東海道新幹線の大井車両基地がある。また、東京貨物ターミナルからは高速貨物列車と呼ばれる最高速度が時速 85km 以上で走る貨物電車が 1 日に 25 本ほど東海道本線を中心に運行されていて、主な行き先は福岡や安治川口(大阪)となっている。その中で最も早く走るのは、スーパーレールカーゴと呼ばれる時速 130km で走る列車である。スーパーレールカーゴの特徴は、動力分散方式車両と呼ばれる、前から機関車で引っ張るものではなく、前と後ろに 2 両ずつ動力車がつけられていて、動力車にもコンテナが 1 両に 1 つ積めるようになっている仕組みの車両が日本で唯一使用されている。



【写真：東京貨物ターミナル駅】



【写真：スーパーレールカーゴ】

撮影：水谷 颯

〈参考文献〉

JR 貨物公式ホームページ

<https://www.jrfreight.co.jp/>

みなとが丘ふ頭公園

文責:福田 健人

みなとが丘ふ頭公園は、東京都品川区八潮 3 丁目 1-7 に位置し、東京都港湾局が管理している海上公園だ。東京モノレールの大井競馬場前駅から約徒歩 25 分で行ける。さらに、公園には来園者用の駐車場が併設されているので車で向かうことも可能である。開園時間は、日没までで夜間の立ち入りは禁止されているので、キャンプで朝まで過ごすなどの行動ができないので注意が必要だ。この公園は、1977 年に東京港に面する 16 ヶ所の都立公園「東京港南部地区海上公園」の 1 つとして開園した。航空写真で公園を見ると三角形であり、面積は約 5 万平方メートルと東京都の公園にしては広い。園内にはキャンプ場があり、バーベキューをすることができる。他にも噴水プールでは、夏になると中央にある噴出から水が放出され、水遊びもできる。また、公園の最も標高が高い所には展望台がある。そこからは、大井埠頭のガントリークレーンを見ることができる。ちなみにガントリークレーンとは、コンテナを船から積んだり、降ろしたりするものである。周りに港関係の倉庫や工場、トラックや貨物列車しかない騒然としている中にぽつんとある、鬱蒼とした公園はなかなか見ることが出来ないなので訪れてみてはどうか。



【写真:展望台からの眺め】

撮影:福田 健人



【写真:公園内の桜】

撮影:河合 道祐

東京港野鳥公園

文責：塚崎 瑛登

埋立地にある東京港野鳥公園 (Tokyo Port Wild Bird Park) は、埋立地の上であることを利用した淡水地・干潟が点在している公園で、大田市場・城南大橋の北に位置している。また、公園内には淡水泥湿地という湿地帯があるが、立ち入り禁止となっている。元々、現在の東京港野鳥公園がある場所は、浅い海であったが、1960年代に埋め立てられ、1978年に東京港野鳥公園が出来た。その後、拡張工事を経て今の姿になった。公園の中心部をコンテナ置き場があるため、公園が東側と西側に分かれている。ちなみに、公園の管理事務所は西側にある。東側と西側は橋によって繋がっており、東側にあるネイチャーセンターでは、自販機があり、ジュースとお菓子が売られていた。

東京港野鳥公園は東京 23 区では珍しい大規模な野鳥公園だと思う。また、園内のところどころに観察小屋があり、野鳥を観察することができる。

<参考文献>

<https://illustimage.com/?id=5500>

大森海苔のふるさと館

文責：安藤 隼太郎

大森海苔のふるさと館は、東京都大田区平和の森公園内に所在する博物館である。大森での海苔養殖の歴史は古く、江戸時代に始まった。これが海苔の養殖の始まりであり、明治から昭和初期にかけて大森は日本一の海苔の生産地として有名になった。大森海苔のふるさと館には、その際に使用され、重要有形民俗文化財にも登録されている「大森及び周辺地域の海苔生産用具」等の大森の海苔養殖の軌跡について展示されている。この海苔生産用具には海底にヒビを埋めるための穴を開けるための「振り棒」や、振り棒で海底に穴を開けるために上に立つための「海苔下駄」、さらに海苔を付着させるための「ヒビ」というもの(現在は網が主流)などがある。

海苔の養殖には潮の干満があり、海水と淡水が適度に混じる等が適した環境下と言われているが、大森はその様な条件を満たしていたため、前述の通り江戸時代に日本初となる海苔の養殖が大森で始まった。また、大森で作られた海苔は将軍家や御三家への献上されるほどの最上品として有名となり、「御膳海苔」や「本場海苔」などと呼ばれる様になった。ところが、昭和 30 年代になると、高度経済成長に伴う工業廃水による東京湾の水質の悪化や、東京湾の埋め立て計画などの理由により、昭和 38 年(1963 年)に約 250 年続いた大森の海苔作りの歴史は幕を閉じてしまった。しかし、今でも海苔の加工技術は引き継がれており、大森周辺には海苔の加工業者や海苔の加工問屋が集まっていて、全国の産地から運び込まれる海苔を「火入れ」「焼き」加工し、出荷する業務を行っている。



【写真：大森海苔のふるさと館】



【写真：海苔作りの模式図】

撮影：安藤 隼太郎

<参考文献>

施設内のパンフレット

<https://smtrc.jp/town-archives/city/omori/p07.html>

大田市場

文責：田畑裕理

大田市場は 1989 年にオープンした大田区東海にある、青果・水産・花を取り扱う総合市場で、特に青果部、花き部では日本最大規模で活発なせりを見ることができる。敷地面積も豊洲市場を抑えて都内 1 位の約 380000 m²で、これは東京ドーム 8 個分に相当する大きさだ。また、市場の様子が見渡せる見学コースも設置されており、せりの熱意を生身で体感できる。(現在は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から見学は受け付けていない)

大田市場の最大の強みはその立地の良さだ。南に羽田空港、東に東京港、北に JR 貨物基地、真ん中を貫くように首都高速湾岸線が通っており物流の拠点として非常に優れている立地にある。

大田市場で取引されているものは、青果部（野菜や果物）、花き部（花）、水産部（魚類）で区切られているが、中でも一日当たり青果部は 3863 t、花き部は 256 万本と他の市場と比べてもかなり多くの量を取り扱っている。



【写真：大田市場西門】

撮影：田畑裕理

穴守稲荷神社 大鳥居

文責：犬島 伸遥

穴守稲荷神社は、東京を代表する稲荷神社で、現在の羽田空港にあたる地域の氏神という歴史と最も空港に近い神社という立地から、空港安全や旅行安全の神社としても知られている。終戦時、このエリア（現在、羽田空港がある島）には、羽田鈴木町・羽田穴守町・羽田江戸見町という3つの町があり、約1,200世帯3,000人が住んでいた。羽田大鳥居は、旧穴守稲荷神社が「羽田穴守町」にあった昭和初期に建立されたものだ。

昭和初期の地図と照らし合わせて照合してみると、当時の大鳥居は現国際線ターミナルの北西側付近、具体的にはB滑走路の南端付近にあったと思われる。海老取川に架かる稲荷橋の東側には参道がまっすぐ伸びており、左右には料亭や温泉宿が多数並んでいた。当時の羽田には海水浴場（海の家）や羽田競馬場があり、行楽地としても賑わっていたそうだ。

しかし、昭和20年9月21日、終戦後に進駐したGHQ（連合軍総司令部）と蒲田区区長を連名とする「住民は48時間以内に強制退去」の命令が下される。退去命令の48時間経過後、3つの町の民家はブルドーザーですべて壊され、旧穴守稲荷神社も現在の羽田5丁目に移設。島の北部にあった東京飛行場は米軍が接收しハネダ アーミー エアベース（Haneda Army Airbase）という名称に変えられる。以後、海老取川以東、つまり羽田空港のある島には民家が存在したことはない。しかし、この大鳥居だけは取り壊されず、羽田空港の島の西端に残された。その後、米軍から飛行場が返還されたのち、昭和59年（1984年）の東京国際空港沖合展開事業によって大鳥居に移設が計画される。しかし、強制退去された元住民から「心の故郷」である大鳥居を移さないでほしいという声が反映され、1999年に現在の南西端に移設されることになり、現在に至る。

<参考文献>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/穴守稲荷神社>

<https://aoitrip.jp/haneda-otorii>

<https://pvhaneda.jimdo.com/資料室/郷土の歴史/>



【写真：現在の犬島居】



【写真：穴守稲荷神社】

※撮影はすべて犬島伸遥

羽田空港と空港連絡鉄道

文責：澤井 崇

私は 2022 年の 3 月に城北高校を卒業した身ではあるが、今回の巡検に（追いコンならぬ追い巡検として）同行した。その際、お土産にちりレポ課題をいただいてしまったので、以下紙面をお借りさせていただく。

羽田空港は東京都大田区にある国際空港で、正式名称を「東京国際空港」という。東京都心に近く日本航空や全日本空輸のハブ空港として機能するとともに、国内・国際線の便数が充実している。そのため、成田国際空港が開港した後も、羽田空港は日本の空の玄関口としての立ち位置を不動のものとしている。

羽田空港の前身となる**東京飛行場**が開設されたのは 1931 年のことである。開設当時は民間飛行場として国内便・国際便を取り扱ったが、戦時中に軍用飛行場として利用されることとなり、終戦後は GHQ によって接収された。GHQ の占領下にあった羽田空港は周辺地域の住民を強制退去させ拡張整備を実現させた。この時点で滑走路は 2 本用意され、面積は 257 ヘクタール(現在のおよそ 6 分の 1 の大きさ)の空港となった。

1952 年にアメリカ軍から返還された東京飛行場の一部は**東京国際空港**として、再び民間飛行場として稼働した。稼働後には滑走路を一本増設し国内・国際線各地からやってくる航空機を多数さばいたが、航空機の大型化や旅行需要の増加に対して羽田空港のキャパシティはあまりに小さく、限界はすぐに訪れることとなった。そこで国際線機能の大部分を完成した新東京国際空港——いわゆる成田空港に移管した。

しかし、国内線の需要は増加の一途をたどり、すぐに羽田空港は処理能力の限界に追い込まれた。そこで羽田空港は羽田沖に空港用地を拡張する沖合展開事業を開始した。東京都による反対運動・騒音問題といった諸問題と向き合いながら、この拡張事業を 2007 年までに完成させた。並行して、再び国際便を受け入れるために国際線用の新ターミナル建設が行われ、こちらは 2010 年に完成した。

現在の羽田空港は滑走路 4 本、面積は 1,516 ヘクタール(城北中央公園の約 60 倍に相当する)で日本一大きい空港であり、3 つのターミナル(国内線 2 つ、国際線 1 つ)を抱える。いわゆる第 3 旅客ターミナルは国際線に割り当てられ、第 1 旅客ターミナルは日本航空、第 2 旅客ターミナルは全日本空輸が主に使用する国内線ターミナルとなっている。日航がワンワールド、全日空がスターアライアンスの一員であることから就航する会社

も両連合所属が多いが、連合に属していない航空会社やスカイチームに所属する航空会社も乗り入れている。

感染症によって航空交通の旅客需要は大きく減少した。私たちが訪れた第1旅客ターミナルは、確かに昔に比べればそこまで多くの人は見られなかった。だがロビーの様子はニュース映像で見たような閑散とした姿ではなく、ある程度にぎわいを取り戻した姿であった。搭乗客や到着客の姿も頻繁にみられた。

ところで、羽田空港にアクセスする方法はいくつかある。ひとつは自家用車で乗り入れる方法、またひとつには空港アクセスのリムジンバスを利用する方法、いまひとつには空港に連絡する鉄道を利用する方法である。ここでは、とりわけ空港連絡鉄道について述べる。

空港本体に乗り入れる連絡鉄道の一番乗りを果たしたのは東京モノレールであった。東京モノレールの設立には日立製作所と名古屋鉄道が参与し(後に名古屋鉄道は撤退)、1964年の東京オリンピックに合わせて現在の天空橋駅までモノレール路線を開業させた。当初は途中駅を設けない単純な空港アクセスを志向していたが利用客が伸び悩んだ。そこで大井競馬場駅や流通センター駅などを開業させ、湾岸地域からの都心アクセスという機能を持たせて経営の安定化を図った。

次に空港への連絡を行った鉄道は、京浜急行穴守線だ。1931年の開港当初から羽田空港への旅客輸送を(本来の目的は観光地穴守であったとはいえ)担っていたが、長らく路線は穴守稲荷を終点とし、羽田空港に直接乗り入れることはなかった。

1990年代、いままで羽田空港のターミナルに乗り入れてこなかった京浜急行が延伸を開始、京急空港線として品川・横浜からのアクセスを実現したことで、ここに空港連絡鉄道が競合することになった。京急の強みは**安さ**と**アクセス性**である。品川で新幹線を降りれば羽田空港まで一本、かつ神奈川からも速達種別を走らせている。空港線が本線から分岐する京急蒲田駅(旧)は構造的なボトルネックとなっていたが、これも高架化によって解消されたことで、現在の空港輸送の主導権を握っている。

このような強敵の出現に対し、東京モノレールも従来の**高頻度**と**定時性**に加わるような新たな策を講じた。第一には東京モノレールの株式を東日本旅客鉄道(JR 東日本)に譲渡し JR 東日本傘下に加えたことがある。これにより JR とモノレールの連携が強化され、両者間で活発にキャンペーンが行われるようになった。また快速——現在の空港快速の種別を新設し、空港アクセスに特化した輸送と通勤路線としての輸送形態を両立さ

せた。また羽田空港からは「モノレール&山手線内割引きっぷ」というきっぷを発売している。これは羽田空港のターミナル駅から山手線の各駅までを500円で乗ることができるきっぷであり、ほとんどの駅では京急線+山手線と乗るよりも安上がりとなる。このような策によって、東京モノレールは現在も京急空港線との競争を戦っている。

だが、最近にわかに浮上している計画がある。「JRの羽田空港乗り入れ」だ。これは田町駅から休止中の貨物線を改良・延伸することで羽田空港に乗り入れを行うというものであり、2029年度の開業を目指すとされている。加えJR東日本には京葉線や中央線とも連絡する路線を建設する計画があり、これによって空港連絡鉄道として3つの会社が路線を乗り入れる予定である。東京モノレールにとってはもちろんのこと、京浜急行にとってもJR線乗り入れは脅威となる計画といえよう。

<参考文献>

- ・日本空港ビルデング株式会社. “沿革”. 2022-04-07 閲覧.
https://www.tokyo-airport-bldg.co.jp/corporate_profile/history/history.html
- ・国土交通省関東地方整備局. “羽田空港の歴史”. 2022-04-07 閲覧.
<https://www.pa.ktr.mlit.go.jp/haneda/haneda/05-info/history.html>
- ・“羽田空港 拡張の歴史”. 2022-04-09 閲覧.
https://abhp.net/air/Air_Haneda_900000.html
- ・NIKKEI STYLE. “東京モノレール50年 車窓から見た湾岸開発史”. 2022-04-09 閲覧.
<https://style.nikkei.com/article/DGXMZ076335490Z20C14A800000/>

旅行記①

文責：坂本 佳翼

春合宿の代替として企画されたこの巡検は、3月30日に行われた。集合場所は東京駅。駅構内が広いとある部員が迷ってしまい、搜索している間に20分の遅延が発生した巡検の始まりだった。

実はこの巡検は、前日に班分けをして大まかな行程表を立ててからの巡検だった。前日に謎解き形式のカードに書かれたものを見て場所がどこか考えるというもので、それによると私の班が訪れる場所は、坂本龍馬像と浜川砲台跡、東京貨物ターミナル、大田市場、東京港野鳥公園、穴守稲荷神社の5つだった。

そんな訳で集合後はまず坂本龍馬像へ向かう。坂本龍馬が土佐藩下屋敷の近くにあった浜川砲台の守護にあたっていたという縁があり、立会川駅出てすぐの場所に像が置かれていた。そこから少し歩くと浜川砲台跡に着く。ペリー来航の折、江戸湾の防備のために土佐藩が作った砲台の、復元されたものが柵に囲まれて置かれていたが、地元の子供たちが鬼ごっこをして遊んでいた。

ここから長い長い徒歩の時間に入る。下町情緒あふれる立会川を抜けると、トラックが行き交う物流の要衝、東京貨物ターミナルが近づいてくる。30分くらい歩いて、東京貨物ターミナル付近に到着した。ここで写真を撮っているうちに、なんともう一つの班と遭遇した。同じ方向から来たようだが、こちらの班はいったん来た道に戻る行程なのですぐにお別れをして再び2班行動となった。

次に東京港野鳥公園へ向かった。新幹線の整備工場を横目に、歩行者が一切いない歩道を、トラックに追い越されながらまた30分歩く。春の陽気ともいえるじわじわと温かい天気、上着を着ていたが暑くなってきた。12時を回り空腹感が段々と主張してくる中、いったん休憩という形で、野鳥公園内で解散。昔は浅い海だったこの場所で、自然にできた池や草原に鳥が集まるようになったことから野鳥保護のためにこの公園が作られたそうだ。落ち着いた雰囲気、バードウォッチングを楽しむ方や、小さい子供連れの方もいて、和やかな気分で過ごせたひとときだった。しかし、13時過ぎにして、まだ昼食は食べられないのである。

次の大田市場は、日本一の青果取扱量を誇る市場であるが、見学等はできないため写真だけ取って移動することとなった。ここから東京モノレール流通センター駅まで道中、京浜運河からの風が心地よいどころかメガネが飛びそうなくらい強烈で、長い歩きで熱

くなった体のクールダウンになった。さて、大田市場ののちは遅めの昼食の予定だったが、ここまで来たら早く見学を終わらせて羽田空港で昼食をとろうということで、天空島駅まで乗車した。この際またもやもう一つの班と合流。あちらは既に昼食を済ませており元気そうだった。

最後の穴守稲荷神社は、空港に近いが意外と住宅街が広がる場所にあり、ずっと大きな道路を歩いてきたため、落ち着いた気持ちになれた。少し歩いて、稲荷神社の大鳥居を見に行った。空港ができる前にあった街に思いを馳せ、この鳥居だけでも残せたことから、地元住民の郷土愛を感じられた。

お参りが終わると遂に最終目的地、羽田空港である。羽田空港到着は 15 時過ぎになり、もう一つの班を待っている間に遅めの昼食ととることになった。後輩と一緒に展望デッキで飛行機の離着陸を眺めながらマックのハンバーガーを食した。

もう一班と合流し、これにて巡検終了。強行軍でリーダーとしては申し訳ない巡検となった。部員は早々帰宅したようだが、私は飛行機を眺めているうちに 40 分経っていた。時間を忘れるとはまさにこのことだった。



【写真：トラックが行き交う道路】



【写真：穴守稲荷神社鳥居】



【写真：羽田空港展望デッキからの眺望】

※写真の撮影はすべて坂本佳翼

旅行記②

文責：市川 洸太

皆さん、こんにちは。今回の巡検の旅行記を書かせていただくことになった市川です。今回の巡検は通常の巡検と異なり、2班に分かれて、事前に先生が考えてくださったヒントをもとに見学する場所を推理し、それぞれの場所でMISSIONをクリアするという方式になっています。そのため、前日のことについて書いていたり、各班1つずつ旅行記があっさりしますが、前記の通りなので悪しからず。また、入部半年のつかまり立ちもおぼつかないような新人なので、至らぬ点があっても許してください。どうしても許せない人は、その怒りを熱エネルギーに変換して、コーヒーでも淹れてください。カフェインが何とかしてくれるはずです。ということで、收拾がつかなくなってきたので本題に移る。

まずは3月29日の巡検準備の日から。この日は先生考案の謎を解いて、どこへ行けばよいのか考える。各班ランダムに選んだ5枚のカードに書かれた内容と、見学地の場所のみが10個書かれた白地図をもとに考える。例えば、

~~~~~

日本の大動脈を支える!!

1964年、世界初の高速鉄道が開業。ハイスピードの安全運行を支える施設がこの地に建設された。何十両もの車両が休むこの地では、運がよければ黄色いお医者さんに会えるかも!!

**【MISSION】**

車両が並ぶ広大な敷地を背景に写真を撮影しよう!!

~~~~~



【写真：利田神社】

という感じだ。ちなみにこの答えは「大井車両基地」。この日は順調に5つの場所を見つけ、いざ巡検へ!

そして3月30日、巡検当日。天候にも恵まれ、巡検日和の中、漢達は東京駅に集う。私たちの班はまず、品川駅から「利田神社(かがたじんじゃ)」という神社へ移動。この場所にはおよそ200年前の江戸時代にクジラが打ち上げられたという記録が残っており、そのクジラの骨をここに埋めたと言われている。ちなみにこの場所、

現在ではかなり海から離れているが、クジラのエピソードや、この周辺に屋形船の乗り場が多くあることからわかる通り、かつては海岸線に面していた。それが埋め立てによって今ようになったそう。人間ってスゲー!!とか思いながら、次は「天王洲アイルふれあい橋」へ。この橋はピントラス構造と呼ばれる、三角形の鉄材を組み合わせで作った橋で、遠くから見ると長方形に対角線が引かれたような形が特徴的である。

また、この橋はドラマなどの撮影地としても有名で、私たちが訪れた際も雑誌の撮影の



【写真：天王洲アイルふれあい橋】

ようなことをしていた。ちなみに、天王洲アイルは元々、ペリー来航の際に江戸幕府が国防のため造ろうとした砲台の中の1つである、第四砲台(未完)の埋立地をもとに開発されたエリアであり、1980年頃までは倉庫が並んでいるだけの殺風景な場所だった。しかし、再開発が進んだことでビルが立ち並ぶオシャンティーなエリアへと生まれ変わったそう。実際に訪れてみても、倉庫を

再利用したであろうカフェや、木々が植えられ心地よいスペースなどがあり、ゆったりとした時間が流れていた。オシャンティーエリアを後にした一行が次に向かうのは「大井車両基地」だ。天王洲アイル駅からモノレールに一駅乗り、獣臭漂う大井競馬場前駅へこの駅、競馬場から割と離れているのにやたら臭い。

まあ、人間も臭せえしなあと思っていると、改札口が競馬の出走ゲートのようにになっているという面白い要素を発見。よーし、勢いよく出走だ!と1km程の道のりを15分という競走馬もびっくりのハイペースで進み、車両基地の新幹線が見やすいポイントへ。



【写真：大井競馬場前駅】

新幹線は1両2~3億円、1編成では約40億円もするという。つまり、今ここに停まっているのは5編成だから、全部で200億円だ!!

次に向かったのは「みなとが丘ふ頭公園」。地図上で見るときれいな三角形になっているちょっと不思議な公園だ。ここで昼食を取るべく、近くのコンビニに向かうのだが、公園の目の前の道路が8車線もある上に、走っている車がほとんど大型トラックでとても怖い。ライオンの檻に入れられたネズミのよ

うな気持ちで横断歩道を渡りコンビニへ。すると、ここでも驚くことが。このコンビニ、見た目はまんまファミマなのに、店名がポートストアって書いてある。しかも、内装も売っている商品もファミマではないか。隠す気のないパクリ店舗かと思いきや、調べてみると、この店は元々港で働く人のために小物などを取り扱っていた売店らしい。それが拡大するにあたって大手コンビニチェーンと提携し、今の形となったそう。看板にファミリーマートと書いていないのは、ポートストアを管理している協会が非営利の団体であるためだという。また一つ賢くなり、買い物も済ませた一行は公園に帰るのだが、その途中で澤井先輩に「こういう場所はナンバープレートを見ると面白いよ」とアドバイスをいただき、トラックのナンバーを確認すると、遠方の地名がたくさん!これも全国から荷物が集まってくる港湾部ならではの光景だ。そんな通の楽しみ方をしながら、公園へ戻り、見晴らしのよい高台へ移動。そこからは東京港の様子がうかがえ、なんといっても一番目を引くのが、いくつも並んだ巨大なクレーン。これは寄港した船から陸へコンテナを移す「ガントリークレーン」だ。ちなみに、このクレーンは麒麟に見えることから「鉄の麒麟」とも呼ばれているが、クレーンの元の語源は「鶴」らしい。そんな豆知識を得意げに披露しているうちに昼食を済ませ、また大井競馬場前駅へ向かう。すると、その途中、車両基地でドクターイエローを発見した。線路のゆがみや、架線の状況などを走行しながら観測する、新幹線のお医者さんの存在で、めったに見られないレア新幹線だ。ただ、次の目的地に向かうべく車両基地に別れを告げ、再びモノレールに乗って流通センター駅へ。この駅の周辺は、名前の通り倉庫だらけで、走っているのもトラックばかり。代り映えのしない景色を歩いていくと、海沿いの公園に建っている建物に到着。これが最後の目的地である「大森海苔のふるさと館」。この辺りは埋め立て前、海苔の養殖が盛んだったため、このような資料館があるようだ。倉庫が立ち並



【写真：大井車両基地】



【写真：ドクターイエロー】

び、トラックが行き交う現在では考えられないが、江戸時代から、昭和の中ごろまで東京都は全国一位の海苔収穫高を誇り、特に大森は将軍家に海苔を献上するほど優れた産地だったそうだ。当時の人たちは手漕ぎの船で海に出て、手で海苔を取り、全て人力で海苔を作っていたという。また、東京湾の埋め立て等によって海苔養殖が行われなくなった後も、海苔の間屋は残り続けており、海苔の産地大森の名を今に残している。ちなみにこの資料館で販売している海苔(産地は有明海だが、大森の間屋協会が仕入れて販売している)を家で食べてみたところ、風味がしっかりとしていてとてもおいしかった。一通り資料館を見た後、少し海辺で休憩し、また流通センター駅へ。そこから解散地点である羽田空港へ向かい、展望デッキに寄った後、解散という流れになった。



以上が品川巡検の一部始終です。いかがだったでしょうか？個人的には東京湾岸エリアの今昔を知れて、とても充実したものになったと思います。後、訪れた場所についての真面目で詳しい説明が他のページにあるので、そちらもどうぞよしなに。

【写真：海苔のふるさと館】 【写真：みなとが丘ふ頭公園】

※写真の撮影はすべて市川洗太

第三章

TOKYOウォーターフロント (2022年6月5日)



行程表～豊洲班

文責：河合 道祐

施設名・移動手段	到着	出発	備考(料金等)
豊洲駅集合	10:00	10:10	
(徒歩移動)	10:10	10:20	
ガスの博物館	10:20	11:20	
(ゆりかもめ 新豊洲→有明)	11:33	11:38	189 円
昼食	11:40	12:40	
(徒歩移動)	12:40	12:55	
虹の下水道館	12:55	13:25	
(徒歩移動)	13:25	13:35	
水の科学館	13:35	14:35	
(りんかい線 国際展示場→新木場)	14:54	14:58	272 円
木材・合板博物館	15:05	15:45	
(有楽町線 新木場→豊洲)	15:55	15:59	168 円

行程表～月島班

文責：水谷 颯

施設名	出発	到着	備考
豊洲駅—新富町駅	10:16	10:20	168 円
築地本願寺	10:30	11:10	
浜離宮	11:30	12:25	
汐留駅—月島駅	12:37	12:43	180 円
昼食	12:45	13:45	1000 円程度
もんじゃストリート	13:45	15:15	
佃島	15:15	15:45	
月島駅—豊洲駅	15:59	16:01	168 円

江東区概要

文責:榎本 眞鑑

江東区は東京 23 区南東部に位置する、人口約 50 万人、面積約 43 km²の区で豊洲・有明・亀戸・大島・東陽などの地区がある。

<区の特徴>

江東区は豊かな水を生かした水運業や天然ガスの採掘が盛んに行われていた。また、海にも近い立地から水運業が江戸時代ごろから発達しており、運河網の整備もその頃から始まった。江戸時代では北関東、東北からの食料品の輸送ルートとして江戸の人たちの生活を支えるために重要な要所となった。明治時代になると水運を活かした紡績や製粉、精米が盛んに行われた。今では運河を利用した公園ができており、自然と歴史に触れ合うことのできる街となっている。

江東区は南関東ガス田の東京ガス田の上にある。そのためガスの採掘が盛んに行われた。しかし、そのことが原因で地盤沈下が進行し、いわゆるゼロメートル地帯と呼ばれる海面より低い位置に土地になってしまった場所もある。現在では木材業、倉庫運輸業が盛んに行われている。その盛んさは地名からも伺える。例えば、木場の地名の由来は木材の置き場だったことから由来し、昔石置き場だったことから古石場、材木商冬木屋があったことから冬木などの地名がある。

<実際の区の様子>

江東区は下の写真の様に道や歩道が綺麗に整備されており、非常に快適な街だった。また、江東区の豊洲にある豊洲公園では造船所の跡が残っており昔の名残も感じる事ができた。



【写真：豊洲の景観】

撮影：榎本 眞鑑

〈参考文献〉

<https://www.tokyo-cci.or.jp/koto/feature/>

<https://geo.8984.jp/tokyo/plat/townguide/1781/>

<https://www.city.koto.lg.jp/380303/machizukuri/sekatsu/dojoosen/7332.html>

<https://www.city.koto.lg.jp/103020/bunkasports/bunka/joho/6379.html>



【写真：跳ね橋と造船所の跡】

写真：顧問 齋藤

豊洲・月島概要

文責：塚崎 瑛登

豊洲・月島地区は東京都江東区・中央区南部に位置し、明治時代末期に東京湾に浚渫した土砂を利用して埋め立てられることでできた地区である。この埋め立て当時は工業用地として利用されていた。その名残として豊洲にある複合商業施設らぽーとの近くに「石川島播磨重工のドック跡」と呼ばれる、船を建造または修理するために構築された施設の跡が残っている。また、月島の東に位置する佃島にある海苔の佃煮などを販売している店など昔ながらな風景も残っている。現在の豊洲・月島は高層マンション群が立ち並ぶ住宅街となっていて豊洲地区には約 37000 人、月島地区には約 16000 人が住んでいる。また、月島には「もんじゃストリート」と呼ばれる商店街があり、多くの観光客が訪れている。そして、その月島の南に広がる晴海地区は、2020 東京オリンピック・パラリンピックで選手村として使われた。



【画像：豊洲・月島の地図】



【写真：豊洲の高層マンション群】

撮影：塚崎 瑛登

がすてなーに ガスの科学館

文責：遠藤 壮一郎

『がすてなーに ガスの科学館』は、暮らしを支えるガスの特徴や役割、さらに、これからの暮らし・社会、SDGs、地球温暖化などの社会問題について、クイズや実験で体験しながら考え、楽しみながら学べる施設である。

館内は「理解する」「体験する」「発見する」「学習する」「実感する」「ふれあう」「楽しむ」の7つの展示ゾーンに分かれている。例えば「実感する」のゾーンではガス灯のやさしい光など本物のガスで灯された炎を間近で見ることができ、ガスの炎の色や形、暖かさを実感できるようになっている。また、「理解する」のゾーンではガスが届くまでの過程などガスの基礎を学べるようになっている。

施設自体は、ヒートアイランド緩和や省エネの効果がある「屋上緑化」、「太陽光発電」、「エネファーム」、「ジェネリック」などの最新のエネルギー設備が導入されている。



【写真：がすてなーに ガスの科学館の展示】

撮影：遠藤 壮一郎

<参考文献>

<https://www.tainavi-switch.com/contents/515/> （最終閲覧日 2022年6月16日）

<https://www.gas-kagakukan.com/about/> （最終閲覧日 2022年6月16日）

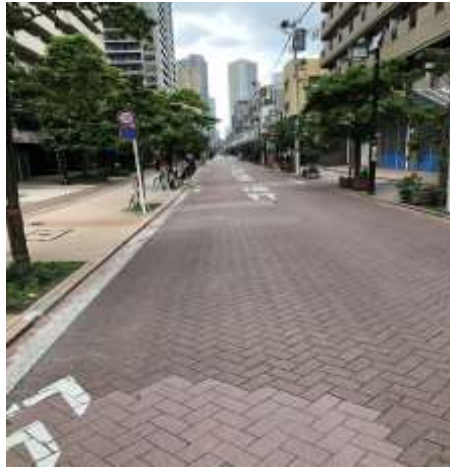
https://park.tachikawaonline.jp/sciencemuseum/8_gaskagakukan.htm

（最終閲覧日 2022年6月16日）

月島もんじゃストリート

文責：安藤 隼太郎

「月島もんじゃストリート」は、東京の下町グルメを代表する「月島もんじゃ」を楽しめるもんじゃ焼き専門店が立ち並ぶ通りで、総店舗数は60を超える。その名の通り、東京都中央区の月島1丁目、2丁目、3丁目に所在する。元々、月島は明治時代に隅田川の河口にある石川島、佃島の先に伸びる砂地が埋め立てられる形で出来た地の地名である。戦後、今で言う「勝どき」のエリアが埋め立てられ、沿岸の鉄工所や機械工場などで働く労働者が次々と移り住んだため、大正から昭和の初めにかけて人口は膨れ上がり、月島には長屋が多く建ち並んで、子どもも沢山育っていったと言われている。その当時、駄菓子屋で人気を博していたのが、子供たちが文字焼きを焼きながら鉄板の上で文字を書いたり絵を描いたりして遊んだことが名前の由来となっている「文字焼き」と呼ばれるお菓子で、1954年創業の好美家が子供の駄菓子であった「文字焼き」を大人向けの料理の「もんじゃ」として提供し始めたのが月島もんじゃの始まりである。そして、その商売が大繁盛したことで月島にはもんじゃの専門店が多数創業し、現在に至る。



【写真：月島駅方面から見る月島もんじゃストリート】

撮影：安藤 隼太郎

〈参考文献〉

<https://tripeditor.com/387387/5>

<https://monja.gr.jp/>

虹の下水道館

文責：元岡 惇

虹の下水道館は、江東区有明にある有明水再生センター内にある東京都下水道局が管轄する施設である。この有明水再生センターは、汚水を処理する施設で、その処理水は東京湾に放流されたり、オゾン処理や繊維ろ過処理によってさらにきれいにされ、センター内で機械の洗浄、冷却に使用するだけでなく、臨海副都心のビルのトイレやゆりかもめの車両洗浄のために供給されたりしている。

また虹の下水道館は、普段入ることのできない下水道管やポンプ所、水再生センターを再現した「見える下水道のまち」を舞台に、下水道の役割や水環境の大切さを楽しみながら学べる体験型施設で、下の写真のように小さな子供にもわかりやすく、楽しく学べるような工夫がなされている。他にも、毎週イベントを開催するなど、小中学生の興味をひく内容などが用意されている。公式ホームページには「小中学生を対象」と書いてあるが、小学校低学年が見学するのにちょうどよい施設だと感じた。



【写真：虹の下水道館の模型】



【写真：有明水再生センター外観】

撮影：元岡 惇

<参考文献>

<https://www.nijinogesuidoukan.jp/sp/information/>

[https://www.tokyo-](https://www.tokyo-odaiba.net/genre/%E8%99%B9%E3%81%AE%E4%B8%8B%E6%B0%B4%E9%81%93%E9%A4%A8/)

[odaiba.net/genre/%E8%99%B9%E3%81%AE%E4%B8%8B%E6%B0%B4%E9%81%93%E9%A4%A8/](https://www.tokyo-odaiba.net/genre/%E8%99%B9%E3%81%AE%E4%B8%8B%E6%B0%B4%E9%81%93%E9%A4%A8/)

<https://iko-yo.net/facilities/3126>

水の科学館

文責：野口 琉也

水の科学館は東京都水道局が運営している科学館である。給水所の仕組みや水の不思議さと大切さを科学の視点で学び、水や水道への興味を深めることができる体験型ミュージアムである。地下四階から地上三階までのフロアで構成されており、地下には本物の給水所「有明給水所」がある。また、一階に広がる芝生広場の下は貯水池となっている。そして、地上一階から三階は五つのゾーンに分かれており、展示を通じて水の世界を体験できる。ここでは、「アクア・フォレスト」というエリアと「アクア・ラボラトリー」というエリアについて紹介していく。

「アクア・フォレスト」というエリアでは、森に降った雨が土を通してやがて湧き出した水が川を作り、ダムへ流れて水道水へとなるという一連の流れが学べる。また、このエリアには体を動かしながら二択のクイズに挑戦できる場所があり、水と自然の関係について知ることできる。実際にやってみたが、思っていたよりも難しく三問中一問しか正解できなかった。そのため、子供から大人までが楽しめる施設となっている。

「アクア・ラボラトリー」というエリアでは、主においしい飲料水を作る仕組みを学んだり、水の性質を利用した体験装置で様々な水の不思議を発見したりして、水についての興味が湧くようなエリアになっている。霧の空気砲やポンプで水の中に泡を溜める、などという体を利用した体験型の実験装置がこのエリアでも多く、小さい子供からでも知的好奇心を育める場となっている。



【写真：アクア・フォレスト】 【写真：アクア・ラボラトリーの体験装置】

撮影：野口 琉也

<参考文献>

<https://www.mizunokagaku.jp/>(最終閲覧日 2022年6月16日)

木材合板博物館

文責:鈴木 統介

木材合板博物館は、東京都江東区新木場に存在する木材と合板に関する資料を収集・展示する施設である。新木場タワーの3・4Fにあり公益財団法人 PHOENIX が運営している。2015年10月までは、特定非営利活動法人「木材・合板博物館」が運営していた。日本において合板が製造されて100年目にあたる2007年10月に木材と縁の深い新木場に開館した。木材や合板の特性、利用方法や製造方法、木材と合板の未来といったコンセプトからなる展示が行われている。利用されている木材の見本や合板を製造する機械も多数展示されている。

木材合板とは木材を薄く剥いた板、すなわち単板を乾燥させ、それを奇数枚、繊維方向が直交するように重ねて接着剤で貼り合わせた木質材料のことである。今や木造住宅を始め広範な分野で利用されている。合板の特徴として、重さの割にその強さが大きいことや、他にも伸び縮みが少ないことや、切断・くぎ打ちが容易であることがあげられる。実際現地に行ってみたところ、木材合板博物館には、木材ごとの軽さや、密度の違いを体験できる小規模な実験施設もあった。さらに、木材利用と地球環境についても学ぶことができた。



【写真：木材合板博物館】



【写真：木の種類による年輪の違いの展示】

撮影：鈴木 統介

<参考文献>

<https://www.woodmuseum.jp/wp/>

築地本願寺

文責：川合 励

築地本願寺は東京都中央区築地 3 丁目にある、1617 年に浅草近くに創設された寺院で、明暦の大火、関東大震災による二度の焼失を経験したが、二回とも再建された。現在の本堂は東京帝国台学名誉教授であった伊藤忠太博士により設計されたものだ。建築研究のためにアジア各国を旅した博士と、仏教伝来ルートを明らかにするためシルクロードを旅した大谷光端との出会いが縁となっている。本堂は広いお堂、それと納骨堂や合同墓などが主となっており、実際に見学に行ったときは外観とお堂しか見学できなかった。

築地本願寺の建物にはインドなどの古代仏教建築を模した外観や多くの動物の彫刻などがある。



【写真：築地本願寺外観】



【写真 動物の彫刻】

撮影：川合 励

〈参考文献〉

tsukijihongwanji.jp

浜離宮恩賜庭園

文責：長谷川 仁

浜離宮恩賜庭園は、もともと將軍家の鷹狩の場所であった。しかし、承応年間に松平綱重の別邸となり、甲府浜屋敷、または海手屋敷と言われるようになった。次いで六代將軍徳川家宣がこれを浜御殿という名に改称し、さらに茶園、火薬所、織殿を建てるなどの大規模な改修を行って景観を整えた。また幕末には、石造洋館、延遼館の建設も行われた。

延遼館は、イギリス王子が国賓として来日することを契機に、外国要人の迎賓館として1869年5月に政府によって建てられた建物である。1879年に、当時のアメリカ前大統領であるグラント將軍が日本を訪問した際には、ここに約2か月間滞在した。その後も多くの国賓を迎え、鉄道開業式などの国の行事の際にも使用されたが1889年12月、老朽化のために取り壊しが決定し、ほどなくしてその歴史に幕を閉じた。

維新後は宮内省所管となり、園地を復旧した後、皇室宴遊のために地となり、名前も浜離宮と改められた。諸外国貴賓来訪の際には、延遼館がその迎賓館にあてられた。特に、グラント將軍の来日の際には、この園内の鳥茶屋で明治天皇と会ったことがある。

園内には庚申堂鴨場と新銭座鴨場の二つの鴨場がある。鴨場とは、その名の通り鴨などを捕獲するための施設である。10代將軍徳川家治の時代である1778年から浜離宮の時代まで、二つの鴨場で鴨猟が行われていた。園内には1935年に宮内省の鷹匠である戸部興四郎によって建てられた、鴨たちを供養する碑もある。また、この浜離宮恩賜庭園は潮の干満に応じて水位を変えることが出来る潮入の池があり、海水の池は都内でこの一箇所だけしかない。さらに現在では、六代將軍家宣の時代には水位を変えるための堰があった場所に、横堀水門という国内で最も大きい水門がある。



【写真：浜離宮恩賜庭園の景観】

撮影：長谷川 仁

旅行記①

文責：犬島 伸遥

今回の巡検では、東京都の月島周辺を散策し、周辺の歴史や土地利用、文化について調べた。まずは豊洲駅から有楽町線で新富町駅に行き、近くにある築地本願寺を訪れた。築地本願寺は京都の西本願寺直轄の神社で、インド風建築の変わった外見の神社だ。内部はかなり荘厳な雰囲気、正直近寄り難かった。その後は徒歩で浜離宮へ向かった。浜離宮は江戸時代に造られた歴史ある庭園で、当時は鷹狩の場として造られたものだ。その後は宮内省管理の離宮となり、今は都立公園として開放されている。都心に残る数少ない自然の一つで、周り的高層ビルとの対照的な風景が面白い。中には松が生えたり茶屋があったりと、江戸時代の名残を強く残している。海水を入れた海遊式庭園のため、池の中には魚などの生き物も生息している。また、石垣や水堀など、当時の城や屋敷を思わせる建築様式が多く見られる。その後は大江戸線で月島に向かった。

月島はもんじゃ焼の発祥となった地ということで、もんじゃストリートへ向かった。当日は日曜ということもあり、かなりの人で賑わっていた。最初は有名店に入ろうとしたが、予約で埋まっていて入ることができなかった。もんじゃ焼きはお好み焼きとは違い、一つの大きなもんじゃ焼きを複数人で分けて食べる。もんじゃストリートは他にも店がある商店街だが、その7割以上はもんじゃを提供していることが今回の土地利用調査で分かった。最後に立ち寄ったのは住吉神社だ。住吉神社は獅子頭、八角神輿で有名な佃祭りを行う神社で、月島周辺の海上交通、渡航安全の守護神として親しまれている。

今回は月島の周辺を巡検した。東京の沿岸部と聞くと歴史が浅いように感じるが、実際には歴史ある街並みや文化が形成されていることを理解することができた。

このように、実際にその場所に行くことでその地域についてよく知ることができる。今後も多くの地域を深く理解していきたい。



【写真：築地本願寺】



【写真：築地本願寺内部】



【写真：浜離宮と高層ビル群】



【写真：浜離宮内にある水堀】



【写真：月島もんじゃ焼き】



【写真：住吉神社】



【写真：月島もんじゃストリート地図】

※写真の撮影はすべて犬島 伸遥

旅行記②

文責:坂本 佳翼

今年度の最初の巡検では前回の巡検に引き続き東京湾岸の土地利用を調べるべく、まずは月島駅に集合した。今回も2班での巡検となり、私は築地、月島、佃島を巡り歴史や文化を学ぼうという班で行動した。

最初に向かった先は築地本願寺。寺院に見えないようなアジア様式の建物で、境内におしゃれなカフェやレストランがあったり、本堂をYouTubeでライブ配信していたりして、今まで行ったことがある寺院とは違った雰囲気を感じられた一方、結婚式、葬式など所謂普通のお寺で行われることも見られて、幅広くやっているのだなと思った。通りかかった観光客は、拝観することがないにしても、足を止めて写真を撮っていたので、建物の見た目そのものが有名なようだ。

まだこのあたりでは隅田川も見えずに、湾岸地域という実感は持ちづらかったが、築地場外市場やかつての築地市場跡を通り過ぎて次の目的地である浜離宮恩賜庭園に着くとその印象は一変。隅田川から東京湾になる境目にある浜離宮恩賜庭園周りには海につながる堀があり、さらには東京湾から海水を取り入れる『潮入の池』があることなどからも、湾岸地域らしさを感じられた。徳川将軍家の鷹場であったこの庭園は、幕府の実験場としても使われていた。また、サトウキビや薬草の栽培や、象の飼育にも使われていたそうだ。その後皇室の離宮により、1946年から一般公開されて今に至る。庭園内には外国人観光客も多く見られ、それぞれ景色を堪能していた。

さて、浜離宮の次は月島に向かい、一旦昼食解散となる。汐留駅で大江戸線に乗るところをゆりかもめに乗ろうとして危うかったが、なんとか月島に到着。もんじゃ店が立ち並ぶもんじゃストリートは、月島駅から地上に出てすぐのところにあった。ちょうどお昼時に行ったこともあってどのお店も満席で、もんじゃストリートを一周してようやく入れる店を見つけた。出汁の味がしっかり付いていてソースなしでも十分に美味しかった。焼き方が分からない時は店員さんに焼いてもらえるので、もんじゃ初心者には良いと思う。ただ、鉄板から直接ヘラで取って食べるので、猫舌の人は食べるのが大変かもしれないが、そこがもんじゃの醍醐味だと思って味わってみてほしい。高1の2人と一緒に行ったが、1人1つ好きなもんじゃを選んで注文したところ、ボリュームたっぷり食べるのに時間がかかり、集合時間に少し遅れてしまった。

息を取り直して昼食後は本日のメインイベント、もんじゃストリートの土地利用調査

に取り掛かる。白地図によるともんじゃストリート沿いだけでも店舗の数は合わせて100以上あるようで、予定時間内に回ることはできたがかなり大変な作業になった。回ってみて感じたことは、駅から遠くなる程もんじゃ屋に比率が下がっていくということだ。私は駅から1番離れたところから土地利用調査を行ったが、駅に近づいていくにつれてもんじゃ屋の比率が上がっていくように感じた。また、当然のことかもしれないが、駅から遠ざかるほど人通りが減ってきて閉まっている店も少しみられるようになっていた。

土地利用調査が終わった後は一旦休憩。中にはメロンパンを買っておやつにする部員もいた。次に行く佃島が最終目的地で余裕があったので、ゆったり15分くらい休憩しからの出発となった。

佃島は月島や豊洲と違い、埋立てによってできた島ではなく、隅田川に浮かぶ小さい島で、江戸時代になって漁師が住み始めた島だ。今では周りも埋め立てられて元の島が分かりにくくなってはいるが、地図上では、はっきりと見てとることができるので、Google mapなどで確認してほしい。この佃島には、近くにあつて今は陸続きになっている石川島の灯台が復元されている。なんで河口から離れたところに灯台が？と疑問に思うかもしれないが、理由は単純。佃島以南は埋め立てられた土地であるため、灯台は埋め立て前にあつたものだという事だ。

灯台からは島であつた名残の橋を渡って本当の最後の見学場所、住吉神社へ向かう。周りにはタワマンが立ち並ぶ一方で神社周辺は下町情緒あふれる街並みが並んでおり、昔らしさを感じられた。部員たちも思わず足を止めて写真を撮っていた。

神社でお参りした後は豊洲駅まで戻つてもう一つの班と合流し、解散。今回の巡検は梅雨の晴れ間にゆったり歩いて回る散歩気分で行けたので、巡検が始めての中3たちも気持ちよく過ごせたと思う。



【写真：浜離宮の潮入の池】



【写真：中島のお茶屋】



【写真:もんじゃ焼き】



【写真:下町と高層マンション(右側は住吉神社)】

※写真の撮影はすべて坂本 佳翼

第四章

付記

2022（令和4）年度 地理部員紹介

【目指せ難関大学!!引退した部員】

- ◎高校3年生：箕中 智哉・下田 健人・山内 凜人・岩田 航
鶴丸 弘毅・原 俊世 ・寺西 優斗・中根 遼
内藤 峻
- ◎高校2年生：坂本 佳翼

【バリバリ活躍中!!現役部員】

- ◎高校1年生
- C組 吉田 駿平（書記）
 - F組 犬島 伸遥（動画編集）
 - H組 長谷山 悠斗（部長）
 - I組 河合 道祐（編集長）
 - I組 市川 洸太（副部長）
 - I組 佐々木 秀真
- ◎中学3年生
- B組 元岡 惇
 - C組 鈴木 統介
 - C組 雨谷 彰悟
 - C組 平塚 雄人（副部長）
 - D組 長谷川 仁（編集）
 - F組 榎本 眞鑑
 - F組 川合 励
 - F組 野口 琉也
 - F組 池田 鴻平
 - G組 福田 健人

◎中学2年生

○D組 遠藤 壮一郎

○D組 近藤 琉生

○F組 水谷 颯

○F組 田畑 裕理

○G組 塚崎 瑛登

○G組 安藤 隼太郎

○G組 新井 友翔

◎顧問

○大畑 由生

○齋藤 讓司

2022 年度地理部・写真部 夏合宿要項

日 程 8月1日(月)～8月3日(水) 2泊3日

宿泊場所(旅館名): たびのホテル lit 松本

住 所 : 〒390-0815 長野県松本市深志1-4-5

行 程 往路 8月1日 あずさ5号 新宿駅発8:00 → 上諏訪駅着10:12

復路 8月3日 あずさ46号 松本駅発16:30 → 新宿駅着19:06

集 合 JR 新宿駅 新南改札を出た正面の「ペンギン広場」7:30(厳守)

解 散 JR 新宿駅 新南改札付近 19時30分頃

合宿中にかかる費用: 総額 10,000 円程度

(内訳) 現地交通費・・・¥3,000 程度 施設の入館料等・・・¥2,000 程度

3日間の昼食代・・・¥3,000 程度 その他お土産代など・・・¥2,000 程度

緊急連絡先 : 大畑携帯××× 齋藤携帯×××

持ち物

健康保険証写・上記合宿中にかかる費用・生徒手帳・筆記用具・帽子・水筒・

2日分の着替え・雨具(レインコートと傘を両方準備すると◎)・常備薬・洗面用具・

感染症と熱中症対策用品・デジカメやスマートフォンなど記録できるもの・レジュメ・

フィールドノート・体温計・検温表

留意点

・持ち物について:

初日と最終日は、全ての荷物を持って行動することになります。荷物は最低限にまとめ、身動きがとりやすいようにして下さい。キャスター付きバッグは禁止です。

・服装について:

私服で構いません。いつもの巡検と同様、「脚」を使った調査です。動きやすい服装、履き慣れた靴で参加して下さい。

・感染症および熱中症対策について:

感染症対策については、以前にお知らせした通り、学校の宿泊行事での対応に準拠します。昼食時は一時解散をしますが、昼食は感染症対策を行っている店を選び、黙食をお願い致します。合宿当日の朝に検温を行い、体調がすぐれない場合は無理をしないようお願い致します。また、合宿中も毎朝検温を行いますので体温計を持参して下さい。高気温で、フィールドワークの実施が難しくなった場合、途中で中止し、ホテルへ引き返す可能性があります。

夏合宿・巡検参加者

◎夏合宿～松本・諏訪地方（2022年8月1～3日）

高校2年生：坂本 佳翼

高校1年生：市川 洸太・犬島 伸遥・河合 道祐・長谷山悠斗・吉田 駿平

中学3年生：雨谷 彰悟・榎本 眞鑑・川合 励 ・鈴木 統介・野口 琉也
長谷川 仁・平塚 雄人・福田 健人・元岡 惇

中学2年生：安藤隼太郎・遠藤壮一郎・田畑 裕理・塚崎 瑛登・水谷 颯

◎東京湾西岸の考察～謎解き巡検（2022年3月30日）

卒業生 : 澤井 崇

高校1年生：坂本 佳翼

中学3年生：市川 洸太・犬島 伸遥・河合 道祐・長谷山悠斗・吉田 駿平

中学2年生：福田 健人

中学1年生：安藤隼太郎・遠藤壮一郎・田畑 裕理・塚崎 瑛登・水谷 颯

◎TOKYO ウォーターフロント（2022年6月5日）

高校2年生：坂本 佳翼

高校1年生：犬島 伸遥・河合 道祐・長谷山悠斗

中学3年生：雨谷 彰悟・榎本 眞鑑・川合 励 ・鈴木 統介・野口 琉也
長谷川 仁・元岡 惇

中学2年生：安藤隼太郎・遠藤壮一郎・塚崎 瑛登・水谷 颯

おわりに

今回で 20 号となった機関紙「ちりレポ」はいかがだったでしょうか。新型コロナウイルスの影響も少しずつ小さくなり、With コロナなんて言葉も目にするようになった 2022 年度。地理部も夏合宿を催行できるようになるなど、ようやくかつての姿を取り戻しつつあります。そんな地理部が作り上げたこの「ちりレポ」の中に、何か一つでも皆様に影響を与えることのできるものがあれば幸いです。個人的には、夏合宿で訪れた松本・諏訪地方がとても印象に残っています。皆様も機会があれば是非……。

そして今年度は部員が大きく増えた年でもあり、なんとその総数 23 人！（23/2/15 時点）ただ、現在中一の部員が一人もいない状況のため、来年度はこの高齢化が進む地理部に前途有望な若者を引き込むことが喫緊の課題になると思います。この「ちりレポ」を読んで地理部に少しでも興味が湧いたという方は、是非見学にいらして下さい！いつでも大歓迎です！

そして最後になってしまいましたが、この機関紙を作成する上で欠かせなかった、合宿・巡検地の皆様、顧問の先生方、日頃の生活を支えて下さった保護者の皆様、この「ちりレポ」を手に取り読んで下さった読者の皆様、そして編集に携わった地理部員。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。そして、今後とも当部をよろしく願います。

2023 年 3 月 31 日

城北中学校・高等学校 地理部副部長 市川 洸太

城北中学校・高等学校地理部 ちりレポ第 20 号

発 行 日：2023 年 3 月 31 日

編 集 者：河合 道祐・長谷川 仁

編集責任者：大畑 由生・齋藤 譲司

発 行 所：〒174-8711 東京都板橋区東新町 2 丁目 28 番 1 号

城北中学校・高等学校 地理部

印刷製本所：〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3 丁目 11 番 24 号

共立速記印刷株式会社